

日本体育学会
体育心理学専門分科会会報
第7号 (通巻第35号)

体育心理学専門分科会

1995年8月発行

体育心理学専門分科会選出の日本体育学会の役員

任 期：平成7年4月1日～平成9年3月31日

理 事 3名

杉原 隆 猪俣 公宏 徳永 幹雄 (順不同)

評議員 19名

荒木 雅信 石井 源信 市村 操一 伊藤 政展
猪俣 公宏 上田 雅夫 岡沢 祥訓 岡村豊太郎
工藤 孝幾 近藤 充夫 杉原 隆 調枝 孝治
徳永 幹雄 中込 四郎 丹羽 劭昭 橋本 公雄
藤田 厚 船越 正康 山本 勝昭

(順不同)

なお、上記評議員の先生には、体育心理学専門分科会の運営委員として同期間活動して頂くことになっています。

はじめに

日本体育学会体育心理学専門分科会
事務局代表 徳永幹雄

体育心理学専門分科会の会報、第7号（通巻第35号）をお届けします。

第7号というのは、平成元年より分科会「会報」という名称を使い始めてからのものです。それまでは「曲り角」という名称を使っていました。通巻すると35号になるということです。

さて、平成6年度の日本体育学会の終了後に事務局で行った主な事業は次のとおりです。

第1は、本年度の日本体育学会における体育心理学専門分科会のキーノートレクチャー、シンポジウムの企画です。体育心理学専門分科会の運営委員の皆さんの意見を尊重し、今年は運動学習における最近の話題を取り上げることにしました。オーガナイザーに伊藤政展氏（上越教育大）をお願いして、企画案を作成していただき、事務局との協議で今回のメンバーを決定しました。運営委員の意見については84頁に示していますので、ご覧ください。

第2は、体育心理学専門分科会の会則の検討です。本分科会には未だ会則がありません。会則がなくてもこれまで十分運営はできました。しかし、会員数も多くなり、さらに発展するにはやはり会則が必要と思われます。他の分科会会則を参考にして82～83頁に原案を掲載しています。本年度の総会でご意見を伺って決定したいと思いますので、ご覧ください。

第3は、体育心理学専門分科会会報の発行です。本号では、とくに学会で司会や座長をされた先生方にその感想をまとめて頂きました。刺激的、発展的に受け取って頂くと有難いと思っています。

第4は、体育学会の前日に開催するプレセミナーの企画です。欧米・北米の体育心理学の動向、運動とメンタルヘルス、メンタルトレーニング実習、そして懇親会を予定しています。多くの参加があることを期待しています。

そのほか、日本体育学会の座長の推薦、「体育学研究」の論文審査員の推薦、日本体育学会当番大学との連絡などです。

今後の問題として、日本体育学会の一般発表論文の審査の問題、口頭発表とポスター発表の形式、自主シンポジウムの開催などの日本体育学会に係わる問題や会務の執行にあたっての事務局のあり方などが考えられます。

本号の編集にあたり、多くの方々に原稿を依頼しました。関係各位に厚く感謝申し上げます。今後も専門分科会活動の発展に寄与するよう努力しますので、会員の皆様のご協力をお願い致します。

平成7年6月21日

目 次

はじめに	徳永幹雄（九州大学）	1	
I. 特別寄稿			
クルマが増えれば事故も増える—統計適用の誤用にご注意—	竹中晃二（岡山大学）	4	
体育心理専門分科会活動30年を顧みて将来を考える	鷹野健次（元川崎医療福祉大学）	11	
II. 日本体育学会第45回大会体育心理学専門分科会関連報告			
1. シンポジウム			
テーマ「優れたスポーツ集団をつくるための心理的スキルをめぐって」			
司 会	船越正康（大阪教育大学）	15	
演 者	飛田 操（福島大学） 「リーダーシップスキル」	16	
	岡沢祥訓（奈良教育大学） 「コミュニケーションスキル」	18	
	石井源信（東京工業大学） 「目標設定スキル」	18	
2. キーノート・レクチャー			
テーマ「スポーツ集団の生産性と集団凝集性、リーダーシップ」			
司 会	杉原 隆（東京学芸大学）	20	
演 者	丹羽劭昭（奈良女子大学）	20	
キーノートレクチャー傍聴記	阿江美恵子（東京女子体育大学）	23	
3. プレ・セミナー			
体育心理学の動向			
「北米応用スポーツ心理学会および北米スポーツ心理学会の動向」			
	高妻容一（近畿大学）	24	
学位論文紹介			
「スポーツ競技者の同一性形成過程とスポーツ場面での			
	危機様態における相互性の関連」	中込四郎（筑波大学）	25

4. 一般研究発表（座長報告）	28
楠本恭久（日本体育大学）	久保玄次（愛媛大学）
伊藤政展（上越教育大学）	中込四郎（筑波大学）
荒木雅信（大阪体育大学）	阿江美恵子（東京女子体育大学）
滝 省治（甲子園大学）	鈴木 壮（岐阜大学）
岡村豊太郎（山口大学）	和田 尚（京都教育大学）
今中国泰（長崎大学）	石井源信（東京工業大学）
筒井靖次郎（愛知教育大学）	鶴原清志（三重大学）
山内正毅（長崎大学）	
5. 大会参加感想	
第45回日本体育学会山形大会に参加して	渡植理保（岐阜県スポーツ振興事務局）
第45回日本体育学会山形大会に参加して	43
III. 日本体育学会第46回大会および関連学会の案内	
1. 日本体育学会第46回大会	45
2. 各種関連学会の大会開催予定	57
3. 関連学会事務局一覧	59
IV. 地区別研究会活動	
1. 関東地区	中込四郎（筑波大学）
2. 関西地区(1)	滝 省治（甲子園大学）
3. 関西地区(2)	高妻容一（近畿大学）
4. 九州地区	山口幸生（福岡大学）
V. 研究室めぐり（その2）	
中京大学スポーツ心理学研究室	武田徹 猪俣公宏 小山哲（中京大学）
中京大学スポーツ心理学研究室	68
VI. 海外だより（その2）	
1. アリゾナ州立大学での研究生活	磯貝浩久（九州工業大学）
2. スウェーデンからの手紙Nationell Kongress-Mental Träning inom Elitidrotten	
参加レポート	佐藤雅幸（専修大学）
参加レポート	73
VII. 国際学会・国際学術調査だより	
海外調査の機会を得て	竹之内隆志 西田 保（名古屋大学）
海外調査の機会を得て	76
VIII. 事務局関連資料	
1. 事業報告	78
2. 総会議事録	79
3. 日本体育学会体育心理学専門分科会の会則案	82
4. 専門分科会企画についての運営委員の意見（平成7年度）	84
IX. その他	
1. 新入会員紹介	85
2. 博士号取得者紹介	85

I. 特別寄稿

クルマが増えれば事故も増える －統計適用の誤用に御注意－

竹中晃二（岡山大学）

ここ2、3年、日本心理学会や教育心理学会等で「統計の誤用」の問題が取り上げられるようになってきました。私は、それらの内容を見て、正直ドキリとする経験を持っています。というのも、「他の人もやっている」という理由で使っていた統計手法が、実は「誤用」であったとわかったからです。さらに、すでに投稿してしまった論文に重大な誤用を発見し、「不採用」を待つ、どうしようもなく嫌な思いをしているからです。あー気が重い。

クルマの数が増えると事故が増えるように、使いやすい統計パッケージがたくさんできて誤用が増えてきました。しかし、これらの誤用は、パッケージに問題がある訳ではなく、実は私達の統計に対する認識に問題がありそうです。厳格でありすぎる必要はないと思いますが、最低限のルールを守ることが必要と思われれます。本稿では、若手の研究者（私もまだまだ若手であることをアピールしておきます）に注意を喚起するために、誤りやすい統計適用例や注意しなければならない解釈の例をいくつか紹介します。

その1－相関分析の見落とし

大学院生の敏之君は新しい敏捷性テストを開発するために、日夜努力を重ねてきました。彼は、250名の大学生を対象に数種類の体力テストと体格検査を行いました。その結果、彼が開発したテスト（狭い部屋でも計れる敏捷性：略して狭敏テスト）と従来のステップテストの間に0.68という、今までのテスト間よりも有意で大きな相関係数を見つけました。彼は、「万歳」と叫び、彼の狭敏テストが従来のステップテストにきわめて類似していること、そして狭いスペースで手軽に敏捷性が測定できることを確信しました。その時は敏之君自身気がつかなかったのですが、後で相関マトリックスを見ると、狭敏テストと身長の間は0.86、ステップテストと身長の間にも0.81の相関係数が存在していました。彼は、「まあ、2つのテストの関係だけ見ればよいか」とつぶやき、狭いスペースの中で狭敏テストが使われることを夢見て一人ほくそえむのでした。

解説：この場合、後でわかったのですが、狭敏テストと身長、ステップテストと身長のそれぞれに相関が高く、2つのテストは身長という同一のもので説明されて

いたのです。その結果、狭敏テストとステップテストとの間に高い相関が認められた可能性が考えられます。相関は、2者間の因果関係を見るものではなく、関係の強さを見るものですが、この場合、明らかに身長という共通に影響力を持つ変数が存在することから、2つのテストを同じ目的で使用するためにはもう少し検討が必要だと思われます。

その2－人為的群分け

大学助教授の聡子先生は、不安の程度とパフォーマンスとの関係を明らかにするため、98名の大学生に全身反応時間課題を行わせました。彼女は、全身反応時間課題開始直前に、被験者に状態不安テストを行わせ、その得点と全身反応時間の平均値の関係を見ようとしました。彼女は、状態不安得点が35点以下の被験者を低不安群、35点以上の被験者を高不安群とし、平均反応時間について対応のないt検定を行いました。聡子先生は、低不安群の方が高不安群よりも平均反応時間が早いと予測したのですが、有意な結果は得られませんでした。そこで、彼女は、状態不安得点が25点以下の被験者を低不安群、26点以上38点以下の被験者を中不安群、39点以上の被験者を高不安群として、1要因の分散分析を行いました。彼女がなぜ得点をこのように分けたかについては理由があります。その一つは、群の人数がうまい具合に32、35、31名とそれらしく人数が振り分けられたこと、もう一つの理由はなによりも群の平均値に有意差が得られたことでした。下位検定（多重比較）を行った結果、低不安群の平均反応時間が高不安群のものより有意に早く、彼女はその結果から不安が高いほどパフォーマンスは低下すると結論づけました。

解説：まず、状態不安得点が35点以下、以上という35点に何らかの意味があるのでしょうか。もし、このテストの35点以上が何らかの病状の基準であるとか、35点という値そのものに何らかの意味があるなら、判別のために使用してもよいでしょうが、この場合の35点は聡子先生が人為的に割り振ったものでしかありません。よくある例として、標準偏差の値で高・中・低群に分けた場合も同じで、連続量を人為的にカテゴリー化し、本来の情報を歪めたに過ぎません。こういったデータはまず分布を検討して、もし可能なら回帰分析などを行うべきです。

その3－差がないという対立仮説

修士論文の実験結果を分析している浩一朗君は、2つのテスト間に有意な差が存在しないので、これら2つのテストは等しく同様のものを調べていると結論付けました。彼は、得意顔でそれらの結果を後輩の前で説明しました。しかし、その話をじっと聞いて

いた卒研究生で軽乗りの和秀君、彼は先日の統計のテストをかるうじてパスしたのですが、次のような発言をしました。「平均値の差を確かめる統計は、差がない、つまり等しいということ棄却することで差があるということ言ってるんであって、差がないことを棄却できないということは、はたして差がないと言えるのでしょうか。そうだ、帰無仮説を棄却することで対立仮説が……。差があるということはないということの逆であって、えーと、えーと。」この言葉を聞いた浩一朗君は、「お前とは対立するから今後一切面倒は見ないことにする。お前の存在を棄却する。」と言って不機嫌になったので、卒論の指導をあてにしている和秀君はあわてて機嫌を取るのです。

解説：従来、私達が行っている有意性検定は、群間または条件間に「差がない」とする帰無仮説を棄却することで、対立仮説である「差がある」ことを示しています。p 値は、帰無仮説を棄却することを失敗する確率を示し、たとえば $p < .05$ で示すことは5%の危険性を犯すが帰無仮説を棄却するという意味です。そのため、最初から「差がない」ということを確かめるためにこれらの検定を使うことは誤適用で、有意な結果が得られなかったのは単に帰無仮説を棄却できなかったという意味でしかないのです。2つのテスト間に差がないことを証明するためには、たとえば散布図を描いて相関係数を計算するなど有意性検定とは異なる統計手法を用いるべきです。

その4 - なんでもカイ自乗検定

由美ちゃんは、体育会卓球部出身のバリバリ頑張り屋の院生です。彼女は、卓球の玉の色、卓球台の色、選手の服の色、体育館の壁やフロアの色それぞれの色の組み合わせによってどのように認知能力が変化するかに興味を持ちました。彼女はコンピュータお宅の敏之先輩に頼んでコンピュータで実験場面を作ってもらいました。実験課題の内容は、同じ背景色の中に幾種類かの指標色を同時に提示するもので、被験者の反応はその中で真っ先に目についた指標色をマウスでクリックすることでした。たとえば、緑色の背景色の中に赤色、黄色、白色の球型の指標色が提示され、被験者が反応するというものです。由美ちゃんは被験者20名を集めてきて、それぞれの被験者に、3種類の背景色の条件に対して3種類の指標色を横一直線に無作為な配置順序にして、3種類の背景色ごとに各6試行、計18試行行わせました。統計処理は、カイ自乗検定を用いることにしました。結果は、20名すべての18試行、計360試行を、背景色（3種類）とクリック指標色（3種類）の組み合わせで、3行3列のクロス表で表しました。その結果、行と列に有意な連関が認められ、白色背景色に赤色指標色および緑色背景色に白色指標色において、多数頻度があることがわかりました。由美ちゃんは、卓球競技の経験があるの

で、緑色背景色に白色指標色の組み合わせが高頻度を示したことに満足し、喜んで何回もラケットの素振りを繰り返すのでした。

解説：このケースは、特にカイ自乗検定に多く見られる誤用（測定値の独立性の条件の無視）です。被験者20名すべての18試行、計360試行のそれぞれの試行は一個一個が独立したものではなく、無作為でもない。つまり、同じ被験者は、よく似た反応を繰り返すということです。

同じ実験で、1名の被験者だけでカイ自乗検定を適用した場合はどうでしょうか。1名の被験者だけの18試行について、カイ自乗検定を用いた場合にはもっと誤りが理解しやすいと思います。ここで1名の被験者につき、背景色（3種類）とクリック指標色（3種類）の組み合わせで3行3列のクロス表を作ったとします。カイ自乗検定では、3種類の背景色（列）の期待度数はそれぞれ6、6、6であり、本来は期待度数に対して観察度数が異なるはずですが、この実験の場合はそれぞれの背景色（列）の試行は必ず6試行になっており、観察度数が期待度数と異なることはありません。つまり、それぞれの背景色の試行は6試行なので、3種類それぞれの指標色が選ばれる割合はそれぞれ2/6、すなわち1/3で、それが3列（3背景色）ある多項分布となっているのです。実験計画と合わない統計適用の例ですが、カイ自乗検定はそれらしい結果を見せてくれるので誤用も多くなっています。

その5－要因配置はシビアに

エネルギーに仕事をこなす研究員の浩一先生は、青年期初期において、投動作の伴うスポーツ競技経験の有無が、青年期後期の投球動作に影響があるか否かに興味を持っています。彼は、大学生の中から競技経験の有無によって2群を設けました。それぞれの群の男女比はほぼ同様にしました。というのも、彼は性差も検討したかったからです。彼は、モーションアナライザーという高価な機器を使用して、被験者全員の投球フォームを分析し、手首の加速度を測定しました。その後、彼は4つの群、すなわち競技経験ありの男性群、競技経験ありの女性群、競技経験なしの男性群、競技経験なしの女性群について1要因分散分析を行い、有意な群間差を見つけ、その後多重比較を行いました。その結果、女子だけに競技経験の差が認められました。先週の学会発表で彼はこの結果を発表しました。フロアから1つの質問がありました。「あの一、えっと、競技経験の有無と男女で2要因分散分析をやられたのでしょうか、交互作用がムニャムニャ・・・。」そこで、ベルが鳴り、座長が「後は個人的に議論ください。」と言って彼の発表は終わりました。彼は、「うっせいな、有意差があるんだから何の文句あるんだよ

一。」とつぶやいて、座長が勧めた個人的な議論もなく、仲間と一緒に会場を後にするのでした。

解説：検定の原則は、上位のものから行うことです。この場合、まずスポーツ競技経験（有・無）×性（男・女）の2要因分散分析を先に行い、競技経験の主効果、性の主効果、そして交互作用の有意性を見るべきです。最初から、1要因で見るとは、危険率 p 値を上昇させた状態で見ているので適当とは言えません。しかも性差や競技経験の差も議論できません。よくあることですが、 t 検定の繰り返しも適当とは言えません。

その6－因果関係まで言えるの？

今春、体育学部の助手に着任したばかりの誠先生は、諸般の事情で、他学部の一般体育実技も担当しています。彼は、日頃から、この多人数を基にして、何か研究ができないかと思案していました。彼の所属する体育学部には、全日本クラスのエリート・アスリートがおります。そこで誠先生はユニバーシアド候補以上のエリート・アスリート10名と彼の担当する一般体育実技受講者200名に対して種々の心理テストを行わせ、群間で比較しました。平均値から見ると、アスリート群は一般体育実技受講者群と比べてすべてにおいて低い値を示し、たとえば特性不安得点が小さいなどネガティブな心理要因が小さいことがわかりました。そのことから、誠先生はエリート・アスリートは精神的に安定しており、これがエリートであるための条件であると主張しました。

解説：この研究は、研究者が実験的に操作を加えることをしていないので、観察研究であると言えます。まず、群の数に差がすぎます。データの数が多いと正規近似するのですが、1つの大学でエリート・アスリートが何百名もいるとは思えません。また、エリート・アスリート群はエリート・アスリートと呼ばれる人達から無作為に選んできた訳ではないので、彼らは同じ大学のよく似た集団であると言えます。競技種目の問題や、チームスポーツと個人スポーツも混同していることも考えられます。その上、結果の解釈として、もともと心理的に安定しているからエリート・アスリートになれたのか、またはエリート・アスリートになった副産物としてそうなったのかは言及できません。つまり、「これがエリートであるための条件である」という主張は大変乱暴なものというしかありません。スポーツ競技別にあたかも異なる性格が存在するような研究が見られますが、もともとそういう傾向の人がその競技を好きになったのか、その競技に親しんだ結果そうなったのかは不明です。この種の研究では、慎重に結果を解釈することが賢明です。

その7ー適当な被験者の数

学会に行くと若手を悩ます質問が必ずとあってあります。特に、若手は、「統計的には」とか「統計上」という質問は苦手です。彼らは実際よく知らないというのは事実ですが、実は若手でなくてもよく知らないのです。その理由は、私達は統計を専門に研究しているのではないからです。皮肉屋の晃二先生は、有意差が見つかるけれども被験者数が少ない研究には必ずケチをつけます。晃二先生は、発表が終わるや否や、待っていたとばかりに手を上げ、質問に立ちます。「結構な御研究だと思いますが、統計上物を語るためには各群の被験者数がちょっと少ないのではないのでしょうか。少なくとも・・・。」といった調子です。今日も、「あー、またあれあれ、あの質問だ。」と陰口を叩かれているとは知らず、同じ質問を繰り返しています。しかし、今日はいつもと様子が違います。今日の女性の発表者はどうも切れ者のようです。彼女は、彼の質問に対してすかさず切り返したのです。「じゃ、先生は統計的には何名が必要だと思われるのでしょうか。」と。しかし、「えっ、その一」といつもたじろぐ発表者の姿を予想していた晃二先生は内心あてがはずれたのですが、それでも顔色一つ変えず、「まあ、物をちゃんと言うんだったら少なくとも各群12名、そうだなあ、20名は欲しいぐらいだな。」と答えました。さて、この根拠はいかが？

解説：サンプルサイズが大きくなれば、帰無仮説は棄却されやすくなります。よって、この先生が言うように、サンプルサイズを増やせば統計的に意味があるというのは信頼性が増すということでしょうか。有意差を考える場合、少数のサンプルですでに示されているのですから、サンプルサイズは関係ないと思います。それよりも、厳密には無理としても（母集団から無作為抽出という統計法の基本原理を厳密にすると、統計的研究は成り立たない）、実験者はせめて被験者の群への割付にバイアスのかからないように行うべきです。しかし、質問者は、全く理論的にありそうもない有意差であると思った場合、その矛盾をついた上で、さらにデータ数を増やして検討を続けて欲しい旨を伝えるべきです。

以上いくつかの誤用や解釈の誤りについて述べてきました。他に、よくある例として、相関係数の大きさと有意性の解釈がごちゃ混ぜになって話をしている場合があります。相関係数が有意であるということは、相関係数がゼロであるとする帰無仮説が棄却されただけにすぎません。にもかかわらず、あたかも相関の高低と取り違えている例がよく見られます。たとえば、0.35という低い係数なのに、 $p < .01$ なので、きわめて相関が高いという誤った解釈です。このような場合でも、「有意」の意味を知ることが重要であると思われまます。もう一つのよくある例として、因子分析によく見られるものですが、抽出した代表

因子の寄与率が低いこと、また同じことですが寄与率を60%ぐらいにとっても因子の数がきわめて多いものがよく見られます。これらは、質問自体がバラバラで、少数の因子でまともななかったことを意味し、質問そのものを検討する必要があります。少ない因子数でしかも寄与率が高い、これが因子分析の見せ方です。また、因子の命名で終結している研究も時々見られますが、統計パッケージの整った現在では「おいっ、もうそんな時代ではないぞ」とひそひそ声で言ってやりましょう。

最後に、私達が統計の誤用を防ぐ際に肝に命じなければならないことは、英文アブストラクトを英語の先生にチェックしてもらうように、統計の専門家に適用についてチェックしてもらうことだと思います。パッケージ統計の普及とともにユーザーが増加し、統計適用の誤用問題は今後も増え続けることでしょう。今後は、誤りを誤りとして指摘する人の存在が必要ですし、さらに統計パッケージのメーカーとユーザーを仲介する人も必要です。それまでは、お互いに注意しあって誤用を少なくするしかありません。しかし、私達の研究は統計そのものではないのですから、その適用は、厳格すぎず、ある程度おおらかに、さりとしてマナーを守って使うことが重要だと思います。

参考文献

- 橋 敏明 (1992) 医学・教育学・心理学にみられる統計的検定の誤用と弊害. 医療図書出版社.

体育心理専門分科会活動30年を顧みて将来を考える

鷹野健次（元川崎医療福祉大学）

まえおき

本邦体育心理学研究の歴史を総ざらいして、何をどういう考えでやって来たかを、日本体育学会発足当初から関係している一人として、とくに初めの頃に焦点をおいて概観せよということでした。

それは発表要旨に書いた通りですが、五月末時点で書きましたので、その後多少の増加がありました。お配りしたのは、その中の

1. 体育心理専門分科会でとりあげたシンポジウムの題の一覧表であります。（これで見ますと、初めの方がブランクですのでここらが神代にあたるのかと思います。その他の資料は関西の体育心理グループに渡して、適当に利用して貰ったらと思っています。もし、希望の方はそちらに連絡して下さい）
2. シンポジウムの内容について

大会号、体育の科学、曲り角に載せられた記事を通して、テーマ別に纏めてみようとはじめは思いましたが、それには時間も足りませんし、力も及びませんので、まず、体育心理関係の“研究の動向”に関するものだけにしぼってみますと、すでに学会発展の節目、節目において会員によって大切な指摘や反省がなされています。それらはリストにして、お配りした資料に添えてあります。

今回は、本邦体育心理の歴史の、上田さんの言う“神代”よりもっと前の（天地創造の頃になりますか）話をし、それを短い時間で切りあげて、それを導入にして、体育心理分科会は何をどういう考えでやって来たかを話し合ってもらいたと思います。

プリントの表紙に書き出ししておきましたような段どりで、松井先生の体育心理学が始まるまでの話をしてみたいと思います。時間を節約するために、原稿を読ませていただいて、あとの時間を末利先生、柏原先生に、補足していただきたいと考えております。

1. 本邦における体育心理学発展の沿革をたどるとき、松井三雄先生の国立体育研究所における研究に始まるのは皆さんご承知のことですが、それに至るまでの経路については、松田岩男先輩の「体育心理学」（現代保健体育学体系4. 大修館、昭54年）の第一章に手際よく述べられております。ヴントの実験室の動作の研究から書き起し、わが国では、松本亦太郎先生の精神動作学（大正3年）に起源をおいています。そのあとを田中寛一先生、寺澤巖男先生、松井三雄先生が引き継いでゆく。これが主流になりますが、もう一つの流れとして、昭和15年の後藤岩男先生のゲシュタルト心理学からのアプローチとして「最近體育心理学要論（目黒書店）」が挙げられています。私たち世代の者には非

常によく解ります。

ところで、松井三雄先生の體育研究所における研究の始まりについては、発表要旨に簡単にのべてありますが、それを補足するものとして先生御自身の回顧が、雑誌「学校体育」の昭和40年5、6、7月号に非常に詳しく述べられております。体育にあまり馴染の無かった自分が、どのようにして體育研究の分野に踏み込んでゆくことになったかが述べられております。更にこのことを補足する意味において、上記の松本亦太郎先生が大正12年に書かれた「心理学講話」からの引用をして、当時の心理学の環境を察してみたいと思います。

わが国の心理学の実験的な研究が画期的に前進するのは、松本亦太郎先生が現在の呼び名での東京大学に就任された大正の初めからであります。それについては日本心理学会編の「日本心理学五十年史」（金子書房、昭55年）によって精しく知ることができますが、著書の「心理学講話」の後に附録：心理学の応用という章があり、その中で、「心理学は理論的研究のみでなく、応用的研究に力を入れねばならぬ。応用の意味には二つあり、一つは心理学の説を他の学問の問題の説明に応用する、例えば、心理学的根拠に立って教育学の論述をするなど。いま一つは、心理学の研究を人間の実生活に応用する方面である。後者について欧米の応用心理学研究の状況を述べると、最近になって極めて盛であり、それは過去においては想像だにし得なかったことである」と述べられております。そして以下のようにその内容を紹介しておられます。教育学における個人差の研究〔ビネー（仏）モイマン、ステルン（独）、これは米国が最も盛である〕、優生問題の研究〔英国のゴルトンから仏、米に伝播している〕、司法の範囲〔犯罪心理学や供述に対する審問の責任の研究など〕、産業界、教育界への人間力の供給〔精神動作学、行動学、産業心理学、精神衛生学、人間工学、知能測定学〕、軍事関係における研究〔航空、戦術、将校、兵の教育、廃兵の教育〕などである。

一方、日本の実状を挙げると、大正5～6年頃からこのことに覚醒し、急激な伸展をしている。即ち、それらを述べると、

- 海軍（松本、田中が顧問）の田中、増田囑託、久保良英（佐世保一広島間を往復勤務など）。そのほかに陸軍の航空、軍医学校、陸軍諸学校の講義
- 産業方面では鐘紡に田中寛、淡路円先生、倉紡に桐原葆見先生
- 逓信省 貯金管理局に鈴木久藏、千輪浩先生、電信局に田中、淡路、石井俊瑞、電話局に寺澤先生
- 司法省 行刑局には寺田精一→内田勇三郎、石井俊瑞が行かれています。
- 東京市 少年職業紹介の部には、久保良英→淡路円次郎先生
能率技師養成所には上野陽一先生が行かれています。

○教育関係でいえば

知能検査など檜崎、田中、久保、岡部先生、東京都教育課の知能検査に渡辺、桑田、城戸、淡路などが挙げられています。

○東大付属航空研究所についていいますと

航空心理部が山川健次郎総長の発意で、大正8年に松本海外視察から帰朝のとき相談され、直ちに実現し、3年後には研究員の補充の必要があり、そのとき増田、松井両君が囑託となるとあります。

松本先生は、これらのことを可能にしたのは、わが国に20年余の実験心理学の素地があったからであると結んでおられます。そして、これらの中には、われわれに馴染の深い先生のお名前を発見することが出来、その最後に松井先生の名があります。

“要するに松本先生のお考えでは心理学は、その定性的研究からは他の学問の発展に貢献し、その定量的な研究からは、人間力の増強に貢献する”と言われております。かくて、大正13年に国立體育研究所の開設と同時に航空研究所、心理部に囑託でいた松井三雄に、白羽の矢が立ったということになります。

2. 體育研究所時代の概略をのべますと、着任当初の松井先生の戸惑いと、一年を待たずして独乙留学の命が下った当時の回顧については前記の「学校体育」に詳しく書かれています。帰朝後の研究の課題や成果については、體育研究会会誌、體育研究にあります。そのまとめが、體育研究所研究概要第一巻に載っております。研究の同志には、内田勇三郎先生、小林晃夫先生の他、山根薫、阿部芳輔、中村弘道、谷本揆一、本田実昌などの諸先生の名が見られます。

體育研究所は昭和16年、日本が戦時体制に急傾斜するときに閉止になり、以後は東京高等體育学校に替り、松井先生は厚生省公衆衛生院に転出されます。（余録になりますが、昭和16年、新しく心理学会創設のとき、その部会としての傷病保護部会に松井先生が所属されたことについて、日本心理学会五十年史に僅かな記事があり、戦時中の状況を察することができます。）

同時代の體育心理に関する著書で特筆すべきは昭和15年、目黒書店から出た後藤岩男の最近體育心理学要論です。これは当時盛になったゲシュタルト心理学の立場から体育的運動という外の場の活動を、これに相属する内の場の体制から説明しようとするもので、従って心身の問題、体育の場、自我、意志、闘志、練習の問題等々をご自身のスポーツ選手の体験を軸にして、単なる思弁的態度に陥らずに出来るだけ即事的態度で論述したものです。ですから、当時の體育専攻学生に非常に人気がありました。この本は戦時体制下にかかれた本であるから、戦後絶版になりましたが、内容は殆んど変わらないで新たに「體育の心理」として金子書房から昭24年に出版されました。本邦スポーツ心理学の魁けともいべき著と思います。

3. 戦後研究活動のはじまりについて

戦時中は体育の研究も著しく偏向を余儀なくされましたが、終戦後暫時の混乱はありましたが、新制大学において体育が正課となるに及び、すぐさま日本体育学会の設立準備がなされ、昭和25年暮には、第1回の大会が東京大学で開かれるまでになりました。この間の関係者の先見となみなみならぬ努力と苦勞のあとは、加藤橘夫先生の体育著作選集第一巻に詳しく書かれています。

日本体育学会が発足するまでは、松井三雄の体育心理の研究は応用心理学会を主として発表され、ときどき教育心理学会、日本心理学会に発表しました。

日本体育学会設立後は、こちらが主となり、はじめの10年ぐらいは、例えば「体育の科学」の心理関係の論文は、専ら、體育研究所時代の研究が紹介されています。東京在住の者で松井三雄研究室の近辺に居た、太田哲男、稲垣安二、渡辺江津や鷹野などが指名されて心理関係の記事を書いたが、10年を経た頃から新制大学の卒業生の活動が始まってゆきます。

以上で鷹野の話は終り、柏原さんに補足をお願いしたのですが、その理由は、日本体育学会の第3回までは私も東京に居りましたが、第4回からは奈良に移りましたので、当時のことは柏原さんに補足して貰った方がいいと思ったからです。具体的に言うと、終戦後学問研究の自由が恢復されて、物資不足の生活難の中にも、あらゆる分野の学会活動が一斉に始まりました。

体育心理学は、上述したように応用心理学の一つとして、専ら応用心理学会を中心に発表されておりました。この状態は日本体育学会が発足して後もしばらく並行して続けられたが、徐々に、日本体育学会の中の体育心理専門分科会へと集中してゆきます。つまり、体育学の自覚の中での体育心理学の位置を考えるようになってゆきます。この辺りが上田さんが問題にしたかった処だろうと思うのです。というのは清原先生と連名で体育心理学の課題と方法を「心理学研究」に紹介しておられたからです。

体育学の自覚の中で体育心理学が如何に考えて来たのかは、みながただ悩んだことであるが、私にもこれ以上は解りません。体育心理分科会がこの問題について如何に苦闘して来たかを振り返って明らかにしておく必要はあると思います。その場合に次の論文が最もそのすじ道を端的に示すものと思われます。

- 昭和43年 松井三雄 体育研究の領域区分としての分科会「教育、体育、スポーツ」 杏林 1968
- 昭和43年 松田岩男 スポーツ心理学と体育心理学 曲り角 1968. 12
- 昭和44年 松井三雄 体育と心理学との接点 体育の科学 1969. 3
- 昭和44年 末利 博 日本体育学会の20年 体育の科学 1969. 11
- 昭和46年 松井三雄 体育研究所の成立課程とその成果 体育の科学 1971. 8
- 昭和46年 松田岩男 体育心理学研究の課題 曲り角 1971. 11
- 昭和48年 藤善尚憲 わが国における体育学研究の動向－体育心理学－ 体育の科学 1973. 8

II. 日本体育学会第45回大会 体育心理学専門分科会関連報告

1. シンポジウム

テーマ 「優れたスポーツ集団をつくるための心理的スキルをめぐって」

司会 船越正康（大阪教育大学）

演者 飛田 操（福島大学）

「リーダーシップスキル」

岡沢祥訓（奈良教育大学）

「コミュニケーションスキル」

石井源信（東京工業大学）

「目標設定スキル」

司会：

1980年代初頭までの体育心理学分野のシンポジウムは、主に運動学習と運動適応研究の2分野に分かれて進められてきた。一般研究はそれを受けて発展したものの、現場の実践に役立つ研究は少なかった。本シンポジウムは、個人の具体的問題解決へ向かう現在の動向を踏まえつつ、個人心理学的アプローチに社会心理学的視点を加えた研究方向を模索するために企画されたものである。



事務局から提案されたネーミングの斬新性の所為であろうか。キーノートレクチュアから専門分科会総会を挟んで参加者の拡散が危惧されたにもかかわらず、200席の会場は立ち見が続出する盛況であった。グループダイナミクス学会などでの活動に基づいて、PM理論と状況適合理論を中心にリーダーシップスキルを論じた福島大学・飛田操氏、バルセロナオリンピックにおけるスポーツカウンセラー経験とシーデントップのコミュニケーションスキルを結びつけた奈良教育大学・岡沢祥訓会員、一流選手の指導経験に触れつつ内発的動機づけ理論の準拠枠から目標設定スキルを押さえた東京工業大学・石井源信会員。各登壇者には早朝8時の最終打ち合わせを始め、窮屈な時間設定の中で結果の特定が困難な要案主義的テーマに果敢に挑戦していただいた。

論旨と総括の詳細は各演者の項に譲るとして、舵取りの難しさを痛感させられた。フロアと登壇者間で4質問に対する11応接が展開された。その都度、戸惑いつつも示唆に富む応答が得られた。フロアから指摘された通り、スキルとして明確に意識化した上で取り組

む方が、スポーツ集団の効率は高まるであろう。しかし、ベリーロールを経て背面跳びへの発展を見せた走り高跳び技術と同様に、優れたスポーツ集団をつくるための技術が独立して体系化できるであろうか。当初からパフォーマンスの向上に限定して討論を進めれば、心理的スキルに対する意識化が更に進んだのではないかと反省している処である。



飛田 操 先生：

すべてのスポーツ集団に有効な、そんな『万能薬』のようなリーダーシップ・スキルは、はたして存在するのであるか？

集団凝集性とグループ・パフォーマンスの関係や、リーダーシップと集団凝集性の関係、そして、リーダーシップとグループ・パフォーマンスの関係は、いずれも、どちらか一方が、他方を規定しているという単純な一方向的な影響過程としてではなく、一方が他方を規定していると同時に、他方ももう一方を規定しているという双方向的、あるいは、循環的な影響過程であるとしてとらえる必要があるのである。

さらに加えて、リーダーシップの効果性は、その集団が置かれている状況や課題環境に依存している。すなわち、ある特定のリーダーシップ・スタイルが有効であるかどうかは、その集団を取りまいている状況によって異なるのである。このような考え方は、リーダーシップの「状況適合理論」という。

このように、リーダーシップは、集団凝集性やグループ・パフォーマンスに影響すると同時に、集団凝集性やグループ・パフォーマンスからも影響を受け、さらに、そこでのリーダーシップの効果性は、その集団をとりまく課題環境や状況によって異なるとするならば、これらすべてを考慮した『万能薬』としてのリーダーシップ・スキルを提出することが如何に困難であるかが理解できよう。もし、これにもかかわらず提出しなければならぬとすれば、そこでのリーダーシップ・スキルは、状況の違いを越えた非常に一般的で抽象的なレベルでの言及（「部下の立場を理解せよ」）か、あるいは、逆に、個々の状況にスペシフィックな、きわめて限定的なレベルでの言及（「私はこうして会社を設立した」）

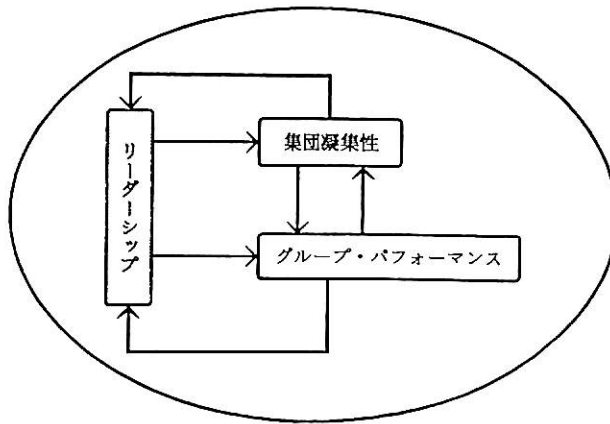


図1. リーダーシップ、集団凝集性および
グループ・パフォーマンスの相互関係

のどちらかにならざるをえないと思われる。

例えば、「きちんと挨拶をする」というのは、確かに、対人関係を形成したり、維持させていくためにもっとも重要で基本的な対人的スキルの一つである。しかし、「きちんと挨拶をする」自動販売機は、不気味である。実は、「きちんとした挨拶」というのは、「相手」や「時間」や「環境」によって変化する、すなわち、状況によってその効果性が異なる「状況適合」的なものであるはずで、「挨拶する」自動販売機の不気味さの理由は、おそらく、そのときの「相手」や「時間」、あるいは、そのときの「環境」といったさまざまな「状況」の違いを無視した一般的で抽象的なレベルでのスキルが付与されていることに基づくものであり、そのような一般的で抽象的なスキルは、個々の状況にあてはめた場合に必ずしも十分に「適合」しているとはいえない場合が多いからであろう。

さらに、スポーツ集団に参加している個々のメンバーは、いずれも個人個人が固有の意志や目標を持った主体的な存在であり、スポーツ集団に参加する理由や動機も、自らの集団の状況をどのように認識しているのかも、あるいは、どのように集団の目標や課題を意味づけしているのかも、個人個人で異なる非常に多様なものであることが示されている。このように、集団レベルで考えてみても、どうやら『万能薬』としてのリーダーシップ・スキルを発見する道は、遠く険しいものなのであろう。

大会では、いろいろ考えさせられた。これまでは「あがりや緊張の克服」、「意欲の向上」といった比較的、個人の内的過程に焦点を当てた問題意識が優勢であったと思われる。できればこの大会を機に、スポーツ集団を全体的に診断したり、それに介入することができるシステム論的なオリエンテーションを持ったスポーツ・カウンセリングの重要性が認識されればと思う。

岡沢祥訓 先生：

指導者と選手あるいは選手同士の信頼関係が確立されていなければ、いくら練習しても、試合でよいパフォーマンスを期待することはできないであろう。この信頼関係は相互理解が正しく行われてはじめて確立されるものである。正しい相互理解には、効果的なコミュニケーションが必要であることは言うまでもないことである。そこで、優れたスポーツ集団をつくるための心理的スキルの一つとして、スキルといえるかどうかは疑問な点が残るが、以下のような観点から提案をさせていただいた。

まず競技集団における人間関係の問題点、特に指導者と選手との人間関係、選手同士のコミュニケーションの問題点について述べた。その後、それらの問題点を解消するために、競技集団で実際行われている心理的トレーニングの例として、卓球ダブルスのコミュニケーショントレーニング、アリゾナ州立大学のコミュニケーショントレーニング、近畿大学の高妻先生のグループディスカッションの利用の例を紹介した。

ここでは、コミュニケーションをスムーズに行うために、オープンマインドな態度で相手に接することが必要であることを述べた。

しかし、それだけでは、効果的なコミュニケーションを行うには、不十分であり、効果的なコミュニケーションを行うためのスキルが必要であることを述べた。すなわち、行動分析の結果から見た効果的なコミュニケーション技術をオハイオ州立大学のシーデントップと共同研究者の研究成果を基に述べた。

これらの提言に対して、異なった目標で活動している集団に対して同じ事が言えるのか。スポーツカウンセラーも持っていないといけない大切な知識である等の意見があった。

石井源信 先生：

筆者に与えられたテーマは、優れたスポーツ集団をつくるための心理的スキルとしての「目標設定スキル」であった。数多くの研究でも、適切な目標設定は、技術的なスキルだけでなく、選手の不安を軽減したり、意欲や自信や集中力を高めたりなど心理的な面に与える影響は大きいことが認められている。

今回の発表は、動機づけの原理・原則にのっとった具体的な目標設定プログラムならびに現場の実践例を紹介することによって、目標設定スキルの向上の必要性を述べた。

ピークパフォーマンストレーニングの一環として位置づけたガーフィールドのプログラム（1984）、マートンの目標設定プログラム（1987）さらにはバンプのワークブック（1987）を参照にした武田らのハンドボールジュニア選手のための教育プログラム（1994）などを紹介した。

それらは、基本的には自己分析からはじまり、原理・原則に基づいたいくつかのステッ

からなる短期目標を設定し、それぞれの段階の課題に対して達成度を数量的に評価できる方法を開発し、パフォーマンスの向上を客観的に確認しながら、長期目標へとつながっていくような段階的な計画のたて方を学ぶという内容である。

実際に我々は「目標は何か」と改めて聞かれるとはっきり答えられないことが多い。「何を目標にしてやっていいか」わからない場合もあれば、わかっているがあいまいな場合もあるが、目標を自分自身で確認するだけでも意味のあることである。まして紹介したような具体的なプログラムを設定して継続的に実施することができさえすれば効果があることは間違いないと思われる。ただそれが果たしてできるかどうかは問題とは思われる。

さらに、現場で活躍している指導者の例としては、サッカー全日本代表監督のハンス・オフト氏のコーチングを紹介した。彼は、すべてのスタートは「観察」であると主張し、まず現状の適切な情報を得て、現実をよく観察することからはじめ、行動を起こす前にまず「目標」を設定する。それもあくまで実現可能な具体的な目標であり、目標が設定されたら常に自分たちの行動がその目標に合ったものかどうかをチェックする。つづいて、どういうスタイルの戦略や戦法で目標達成を可能にするかという青写真を描き、個々人に与えられる役割分担を明確にする。そして、その役割を果たすために各ポジションのプレイヤーがどのようなスキルとフィットネスを身につければいいかを指示し、練習で習得させる。その結果はそれらが身についたかどうかを試合でチェックし、選手にフィードバックする。

以上紹介したプログラムならびに優れた成果をあげている実践的手法は、確かに参考になる。優秀な成績を収めている指導者は紛れもなく優れた目標設定家であるといわれ、オフト監督の例も原理・原則にのっとり、しかもあくまでチーム中心に個人レベルの目標からチームレベルの目標への方向づけがしっかりとなされている。ただ実際場面では種目の特性や個人の特性や集団の特性などのさまざまな条件を考えると、目標設定プログラムを実行していくことは意外に難しいといわざるを得ない。

それは、フロアーからの意見にもあったように、特にチームレベルで考えた時である。チームの各メンバーは考え方や価値観や能力レベルは個人差が大きく、さまざまである。全日本のような等質の集団の場合は、コントロールしやすいが、異質な集団の場合は個人の目標をチームの目標にいかに向づけていくかが指導する立場では大切なポイントになる。現場で本当に重要となるのは指導者自身が集団をどのように考え、どのようなチーム像を描いているかである。その場合に抜きにすることができないのは飛田氏が扱われたリーダーシップスキルであり、岡沢氏が問題にしたコミュニケーションスキルである。最も基本的で実際的な目標設定スキルを向上させながら、集団スキルを高めて、優れた集団をつくりあげていくことがのぞまれる。

2. キーノートレクチャー

テーマ「スポーツ集団の生産性と集団凝集性、リーダーシップ」

司会 杉原 隆（東京学芸大学）

演者 丹羽劭昭（奈良女子大学）

司会：

本テーマは、分科会としてこれまで取り上げていない領域であり、また、引き続き行われるシンポジウムのテーマとも密接な関係を持つ内容で、タイムリーな企画であった。演者も長年にわたって集団研究をされてきた第一人者で、これまでの自身の研究を中心に用意された分厚い資料に基づいてレクチャーがなされた。



終わってみての感想の第一は、このテーマで40分ではあまりにも時間が短すぎたことである。多くの研究の蓄積を持つ演者としては、話したいことを十分伝える時間がなくて、歯がゆい思いをされたのではないかと推察する。

第二には、ほとんどの聴衆が集団研究の専門家でない点を考慮して、ご自身の研究よりは、最近の集団研究の現状と成果を整理していただき、問題点や将来の方向性について話題を絞って分かりやすく講義していただくと、よりレクチャーらしくなったと思われる。個人的な関心を言わせていただくと、集団の目標との関係で生産性をどの様に操作的に定義すべきか、集団構造において生産性を凝集性やリーダーシップと並べて媒介変数として位置付けるのか、生産性をoutputと捉らえるのかといった辺りを明確にさせていただくと有り難かった。

要旨：

集団生産性とは

集団は、一般に個人では達成できない目標を実現するためのある種の意図をもって構成されている。集団生産性はこの目標志向的活動を規定する要因と考えられる。

スポーツ集団の場合、集団の目標は各集団によって異なるが、多くは①競技力の向上
②仲間とスポーツを楽しむことにまとめることができる。

したがって、ここでは集団の生産性について、基本的な集団機能である①集団目標達成機能（Task Function）と②集団維持機能（Group Maintenance Function）の両機能と集団凝集性やリーダーシップがどのように関係するかという視点から考える。

集団生産性と集団凝集性

ここでは集団凝集性を「成員に集団にとどまりまとまるように作用する心理学的力の総量」と定義する。いまスポーツ集団のTask Functionを競技力向上に限定して考えると、特に戦績と密接に関係するのは、人間関係構造としての権限構造（集団の規範を決定する権限の所在から類型化された



集団の構造）、モラル（志気）、リーダーシップ、集団成員性などが考えられる。そしてこれらと関わりながら全体を包括する形で集団凝集性を考えることができる。従来の研究では、凝集性－モラル理論と凝集性－魅力理論が提唱されているが、いずれも生産性と凝集性の明確な因果関係は確かめられていない。しかし集団魅力の源泉とTask Functionが密接に関係することが次第に明らかになってきた。すなわちTask Functionはまず権限構造と密接に関係している。例えば、日本選手権をとるようなスポーツ集団では部員外型が圧倒的に多く、そのような構造型では、集団の威信の魅力が極めて強いことなどがわかってきた。したがって、凝集性－魅力理論は生産性と関わって、魅力－生産性理論として、その理論的・実証的研究の発展が期待される。

集団生産性とリーダーシップ

リーダーシップは理論的には、個人的心理のダイナミックスを基礎に集団的機能として作用する。その影響は受け手がリーダーを受け入れる程度に応じ、しかもリーダーを受け入れる程度は、リーダー選出への関わりとも関係があるので、権限構造型によって効果的なリーダーシップ型が決まってくる。例えば運動部の場合、部員外の人や少数の部内の主脳による指名または推薦という形でキャプテンが選出される部員外型や部主脳型では、どちらかという上意下達の垂直型人間関係が特徴的である。したがって部員外型の運動部では民主的リーダーシップより権力型リーダーシップの方が効果が高い。他方、話し合いでキャプテンを決める部員型の部では民主的構造をもつ水平型人間関係が特徴的で、ここでは権力型リーダーシップは効果が少ない。日本では運動部の生産性と関係してPM型リーダーシップの研究が進んでいる。例えば課題達成機能からみるとPM型が他の3型より効果が高いというのが常識となっているが、相反するP(Performance)機能とM(Group Maintenance)機能とが、スポーツ集団のような機能集団の場合

に共存することは理論的に矛盾がある。最近の研究で、P機能には圧力（S）因子と技術指導（C）因子があり、この技術指導因子が集団維持（M）因子と圧力因子を結ぶ触媒機能を果たしていることがわかってきた。そしてC，S，Mリーダーシップと権限構造型には明らかに対応関係がみられ、両者間に双方向影響交換過程のあることがわかってきた。例えば男子の大学の運動部では監督・コーチのリーダーシップは、部員外型では技術指導やその複合した機能が集団生産性（強さ）に効果を発揮し、部員内主脳型では効果が少ない。当然、男女共、圧力機能のみの場合は、練習参加率は高いが、強さや集団魅力には効果を発揮しない。このようにスポーツ集団の生産性は監督・コーチやキャプテンなどの主脳者が、権限構造型に応じて、それぞれのリーダーシップを發揮することで、合理的に調整されていると考えられる。その他、スポーツ集団の凝集性やリーダーシップ研究における問題点を指摘した。

阿江美恵子（東京女子体育大学）

演者は、スポーツ集団の研究では第一人者である。しかし、ここ何年か集団研究から少し離れておられるので、ここでの発表は演者の研究の集大成であろうと期待して会場に入った。

レクチャーは演者のいつもながらの詳細な資料に基づき開始された。発表に先立ちグローバルな立場から研究したいという演者の信念が強調され、国際会議で発表される姿とだぶったことを付け加えておく。

集団の研究の中で主として集団構造、モラル、集団魅力、PMリーダーシップがこのテーマでのキーワードと言ってよいであろう。それらの概念を中心にスポーツ集団についての研究結果が紹介された。

集団構造については規範決定から見た構造（丹羽は権限構造と呼んでいる）の類型化がなされ、集団の4機能との関連が示された。戦績を集団生産性ととらえると部員外型、部主脳型が生産性が高いことが見出されている。また、PM型のP（集団維持）機能に、圧力因子と技術指導因子を見出している。しかしこれらの結果は因果モデルではないので戦績をあげるために部員外型や部主脳型が有効であるという方向の結果は導かない。さらに、部の指導者の観点や継続的な集団の観察が欠如しているとか、様々な種目をひとまとめでよいか、という問題も指摘できるであろう。それでもスポーツ集団の研究に果たした丹羽の研究グループの功績は多大である。

しかしながら、近年研究があまり進展していないというのが、正直な感想である。研究方法上に残されている問題も大いにあるし、スポーツ集団の閉鎖性も研究のネックになっていることも事実である。今後の研究の発展を期待したい。

3. プレ・セミナー

体育心理学の動向

「北米応用スポーツ心理学会および北米スポーツ心理学会の動向」

高妻容一（近畿大学）

平成5年度、近畿大学の研究留学制度から州立米国フロリダ大学（University of Florida）へ1年間の留学をした。これを機会に今年も含めて米国体育学会、北米スポーツ心理学会、北米応用スポーツ心理学会、米国心理学会、カナダスポーツ心理学会などここ1年半で10の学会に参加してきた。その中でも量的・質的研究の発表の場としての対称的な2つの学会を紹介し、北米の研究動向を報告する。

北米応用スポーツ心理学会（AAASP）は、1981年に提案され1985年に第1回大会を開催している。その目的は①スポーツ心理学の分野の明確な定義を確立し、研究者やプロのスポーツ心理学者・コンサルタントとしての地位を明確にしようというもの。②スポーツ心理学のプラクティスとトレーニングの基準を明確にする必要がある。③スポーツ心理学の現場での応用やプロのスポーツ心理コンサル



高妻容一氏

タントなどの「応用」という面に多くのスポーツ心理学者や関係者が興味を持っていることから、その分野での要求を明確なものにしたいなどであり、これらに積極的にチャレンジしたいというものである。またスポーツ心理コンサルタントとしてのライセンス制度もできており、それを獲得するための単位をとるワークショップも学会の前に開催している。学会の企画は研究発表はもちろんの事、シンポジウムやワークショップなど実際に現場で指導したり、活用するためのテクニックの情報交換など日本の学会とは全く異なる企画が盛りだくさんである。北米応用スポーツ心理学会の3つの分野は次の通りである。

- ① Health Psychology of Sport
- ② Intervention/performance enhancement of Sport
- ③ Social Psychology of Sport

1989年からは、機関誌として「Journal of Applied Sport Psychology」が発行され、そ

の目的はスポーツ心理学の定義、スポーツ心理学者になるために必要なトレーニングや教育的経験や学歴、スポーツ心理コンサルタントとしてのライセンス、スポーツ心理学を学ぶ学生への積極的な活動・セミナーを提供する。健康心理学や社会心理学、そしてパフォーマンスを上達させたり選手やコーチを手助けするための分野などを目的とする人々への情報提供などを行うことである。

北米スポーツ心理学会（NASPSPA）は、1967年から毎年開催されており、その目的は研究に対するものがほとんどであり、研究者の情報交換、スポーツ心理学者の現場での問題点などを討論する、毎年の学会とニュースレターなどの機関誌でスポーツ心理学を発展させていくというものである。1979年から機関誌が発行され、1988年から「Journal of Sport & Exercise Psychology」と名前が変更され、「Journal of Motor Behavior」も年4回発行されている。この学会の構成は、

- ① Sport Psychology
- ② Motor Learning and Control
- ③ Motor Development

である。最近では参加者のほとんどが②③の運動学習関係分野の研究者でしめられており、スポーツ心理学関係者は応用スポーツ心理学会へと興味が移ってきている。

最後に、量的研究を中心とした北米スポーツ心理学会（NASPSPA）は、1991年に623名の会員が94年には394名と4年間で229名の減少、スポーツ心理部門では4年間で160名減少している事実がある。一方応用スポーツ心理学会（AAASP）は、初め374名から始まり、94年には847名と毎年会員が増加し続けている。このことから理解できるように、北米では質的研究を中心とする応用スポーツ心理学の分野の発展が見られ、今後もこの傾向がますます強くなると考えられる。

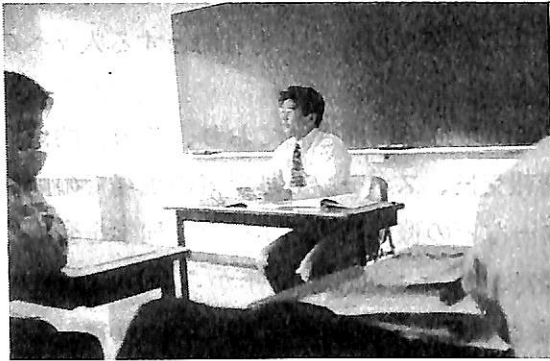
学位論文紹介

「スポーツ競技者の同一性形成過程とスポーツ場面での 危機様態における相互性の関連」

中込四郎（筑波大学）

「スポーツ場面で経験する危機がスポーツ選手の青年期の発達課題である同一性形成にどのような係わりをもっているのか」を検討することが、学位論文の目的でした。この主題を決め（最初から全ての見通しがあったわけではありませんが）、研究資料の収集、そ

してまとめまでの期間は、ほぼ30代の歩みと一致します。この間、多くの方々から教えを受け、また協力を得ることができました。



中込四郎氏

一つの研究テーマと長く係わるためには、かなりの思い入れがないとできないような気がします。

以前からパーソナリティの問題に関心があったわけですが、この主題を明らかにすることによって、「スポーツ経験と人格形成の因果関連的理解に迫れる、少なくとも、従来の研究よりも両者の関係についてスペキュレーションの幅を狭めることができるはず」と意

気込みました。また、人格変容要因ないしはスポーツの経験要因として危機に関心を持ったことから、相談室の中でクライアントの過去の危機にばかり傾聴している自分に気づくことがしばしばありました。自ずと、スポーツ心理学領域の他の主題への関心が薄らいでいってしまい（このころ、学会活動は発表会場の外で交流を深めました）、大学院レベルの学生の研究指導は、かなり狭い関心から、しかも指導者主導型で行う傾向が強かったと反省しています。

もう一つ、特定の研究主題に深く自我関与していくためには、それなりの必然性みたいなものがあるようです。もちろん「今思えば」といった後づけではありますが、私の場合も例外ではなかったようです。

6年間勤務した北海道教育大学旭川分校から筑波大学に転出するにあたり、どこかに「まとまった仕事をしたい」と願う気持ちがありました。来てみると、皆さんがその道のエキスパートであるかのように私には映りました。そんなおり、J. of Youth & Adolescenceという雑誌の中でBourne, E. という方が50ページにわたり、同一性研究のレビューを行っていた論文を手に入れました。同一性の概念については、友人の鈴木君（現岐阜大学）が修士論文で扱っており、また私も精神分析的自我心理学の文脈でEriksonを知っておりましたので、抵抗なく読み進めることができました。恐らく、心理学領域で最も多く行われた操作的研究の一つだと思えます。以後一年近くは関連論文ばかりを読んでいました。

筑波大学への転出は、さらに新しいチャンスを私に与えてくれました。それは、以前から関心を持っていた臨床心理学の活動の場として、学生相談室でのカウンセリングのお手伝いができるようになったことです。来談してくる学生さんは、さまざまな問題を投げかけてきました。悩んでいる本人は今まさに心理的危機にあることは当然ですが、「この期

の学生さんはけっこう悩むものであり、時にはその悩みが、成長の契機になっているようだ」と実感する状況が生まれてきました。また、相談室には体育系の課外活動を行っている学生（体育専攻生）さんも訪れてきました。そうすると、一般の学生と体育専攻学生の違いを種々の面から経験するようになります。時には、「この学生にとって、これまでのスポーツ競技の経験は何であったのか」と問い掛け、積極的な答えを自分の中で見いだすことができないでいました。

このようなきっかけがあったからといって、同時に学位論文を意識したわけではありません。それはだいぶ後になって、学生時代の指導教官でもありました市村教授より、学位論文としてまとめることを勧められてからです。

その後、かならずしも順調にいったわけではありませんが、とにかく、40代に一歩足を踏み出した年に、博士（体育科学）を取得することになる論文ができあがりました。おまけに、文部省科学研究費からの出版補助を得て、「危機と人格形成」（道和書院）として刊行することができました。

論文のあとがきに、「同一性形成は生涯にわたって行われる心理社会的発達課題である。この“あとがき”が、自分の研究活動の“あとがき”とならぬようこれからも、相互性の高い取り組みをしていきたい」と、個人的なことを書きました。私の中には、「螺旋形的人格発達観」みたいなものがあります。書き上げた論文を振り返り、「スポーツの“身体性”を抜きにして彼らの人格形成を語ることの限界」を感じ、難しい課題を自覚するようになりました。その学位論文の仕事に終止符を打つと、時を待たずして、勤務大学の中のスポーツクリニックに心理部門を新たに設ける計画が起きました。現在、周囲の協力者を得ながら、クリニックの活動を通してますます臨床に深く関与するようになってきています。恐らく、再び「スポーツと人格形成」の問題に自分の関心が向いていくことになるでしょう。

最後になってしまいましたが、このような企画を設けていただきました事務局の先生方に感謝申し上げます。論文の中味を紹介することなく、勝手なことを書かさせていただきました。私にとって、今回のセミナーはとても意味あるチャンスとなりました。



懇親会風景

4. 一般研究発表（座長報告）

演題番号 031004～031007

楠本恭久（日本体育大学）

「ソフトテニスのサービスと心拍数変動－ポジション別の比較－」

山崎勝男（早稲田大学）

「ストレス・プロフィール手続きを用いたA型行動パターンの評価－タイプAおよびBの比較研究－」

竹中晃二（岡山大学）

「遅い速度の動作遂行が生体に与える心理生理的影響－大学生女子と中学生女子を対象として－」

井上九美（徳島大学）

「音刺激によるテンポの変化が快適感に及ぼす影響－メトロノームによる前額皮上電位と心拍の変化を中心に－」

丹羽昶昭（奈良女子大学）

山崎氏の発表は、ソフトテニスにおいて、従来サービスをおこなう必要のなかった前衛（フォワード）もサービス実施の義務を負うこととなった新国際ルールに焦点を当てたものであった。従来からの各ポジションを独立変数として、サービス時の心理（STAI）・生理変数（ECG, EMG）を測定した実験的研究である。STAI得点からは、特徴的な傾向が見いだせなかったが、3条件（広エリア・狭エリア・レシーバ付き）ともに、フォワード群に比べバックス群にHRの上昇がみられ、「専門技術者としての誇りと、失敗に対する緊張」をその起因としている。

竹中氏の発表が、連名者である福井氏へ急遽変更となった。福井氏はA型行動パターンと虚血性心疾患を取り上げ、従来質問紙法に依っているA型行動パターンの評価法において、鏡映描写課題を用いたストレス・プロフィール手続きによる生理反応の結果から、これらも生理的指標（HR・ST・SCL等）の測定がA型行動パターンを評価する客観的測定法と見なし得ることについて報告している。

井上氏は呼吸数・心拍数・GSRの測定から遅いテンポでおこなう動作が心身に及ぼす影響について報告した。ここでは、各速度における、課題の動作回数、心拍数、呼吸数を中心に発表した。結果から、課題a（両腕を身体の前で左右交互に回す動作）の遂行時および呼吸数の変化に興味深い結果が得られたとしている。

丹羽氏はメトロノームを使用して、そのテンポと快適感との関係についていくつかの仮説の検証を試みた。そして、「概して速いテンポより遅いテンポの方に快適感をもつ」等の結論を導いている。

以上4題の実験報告は、生理的指標を用いた、各々に興味深い研究であった。今後も継

続的研究がおこなわれ、新たな報告のなされることが期待される。

演題番号 031008～031010

伊藤政展（上越教育大学）

「運動学習と準備電位」

正木宏明（早稲田大学院）

「予告反応時間の周期性とCNVとの関係」

佐久間春夫（国士館大学）

「CNV反応様式からみた陸上競技の種目特性」

平工志穂（娘女子大学院）

正木氏は、弾道的な力の表出課題において、目標値が明確に設定された場合（目的的条件）の準備電位の後期成分の振幅は、目標値の設定されない場合（無目的課題条件）の振幅よりも大きくなること、また目的的条件では、反復練習に伴い、準備電位の立ち上がり時期が早くなるという実験結果を示され、その理由は、運動に目的性が加わると課題遂行に対する注意や動機づけが高まるからだ、と解釈された。脳波の解析を通して運動学習の過程を明らかにしようとする試みが増す中で、示唆に富んだタイムリーな話題であったが、後期成分の電位の差は、運動プログラム作成の困難度といった反応システム内での処理の差を反映している可能性があるのではないか、という印象を持った。

佐久間氏は、予告反応課題において、反応時間の変動には一定の規則性があり、ほぼ90分から120分の周期で反応の遅速が交替すること、さらに前頭部と中心部のCNV電位の増加は反応時間の短縮と密接に関係していることを報告された。生体リズムについて予備知識を持っている者でさえ、データが示すその支配力に驚きを禁じ得なかった。万事にindependentでありたいと考える筆者など、「その制約から解放されるてだては？」と、ついつい頭の中で先を急いでしまった。ただし、時間経過に伴って反応時間の変動の幅が小さくなる傾向について、説明を伺う時間的余裕がなかったことが悔やまれた。

平工氏は、陸上競技の短距離選手と長距離選手を対象として、単純反応課題遂行時のCNV反応パターンを比較したところ、短距離選手は長距離選手より反応時間が短いこと、また初期成分、後期成分のいずれにおいても、短距離選手は長距離選手よりも大きな電位を示すこと、を明らかにされた。さらにCNVの反応様式から種目間の心理的スキルの差を捉えることの可能性について言及された。

演題番号 031011～031013

荒木雅信（大阪体育大学）

「障害をもつ生徒における系列反応特性」

乾 信之（鳴門教育大学）

4. 一般研究発表（座長報告）

演題番号 031004～031007

楠本恭久（日本体育大学）

「ソフトテニスのサービスと心拍数変動－ポジション別の比較－」

山崎勝男（早稲田大学）

「ストレス・プロフィール手続きを用いたA型行動パターンの評価－タイプAおよびBの比較研究－」

竹中晃二（岡山大学）

「遅い速度の動作遂行が生体に与える心理生理的影響－大学生女子と中学生女子を対象として－」

井上九美（鶴岡女子大学）

「音刺激によるテンポの変化が快適感に及ぼす影響－メトロノームによる前額皮上電位と心拍の変化を中心に－」

丹羽劭昭（奈良女子大学）

山崎氏の発表は、ソフトテニスにおいて、従来サービスをおこなう必要のなかった前衛（フォワード）もサービス実施の義務を負うこととなった新国際ルールに焦点を当てたものであった。従来からの各ポジションを独立変数として、サービス時の心理（STAI）・生理変数（ECG, EMG）を測定した実験的研究である。STAI得点からは、特徴的な傾向が見いだせなかったが、3条件（広エリア・狭エリア・レシーバ付き）ともに、フォワード群に比べバックス群にHRの上昇がみられ、「専門技術者としての誇りと、失敗に対する緊張」をその起因としている。

竹中氏の発表が、連名者である福井氏へ急遽変更となった。福井氏はA型行動パターンと虚血性心疾患を取り上げ、従来質問紙法に依っているA型行動パターンの評価法において、鏡映描写課題を用いたストレス・プロフィール手続きによる生理反応の結果から、これらも生理的指標（HR・ST・SCL等）の測定がA型行動パターンを評価する客観的測定法と見なし得ることについて報告している。

井上氏は呼吸数・心拍数・GSRの測定から遅いテンポでおこなう動作が心身に及ぼす影響について報告した。ここでは、各速度における、課題の動作回数、心拍数、呼吸数を中心に発表した。結果から、課題a（両腕を身体の前で左右交互に回す動作）の遂行時および呼吸数の変化に興味深い結果が得られたとしている。

丹羽氏はメトロノームを使用して、そのテンポと快適感との関係についていくつかの仮説の検証を試みた。そして、「概して速いテンポより遅いテンポの方に快適感をもつ」等の結論を導いている。

以上4題の実験報告は、生理的指標を用いた、各々に興味深い研究であった。今後も継

統的研究がおこなわれ、新たな報告のなされることが期待される。

演題番号 031008～031010

伊藤政展（上越教育大学）

「運動学習と準備電位」

正木宏明（早稲田大学）

「予告反応時間の周期性とCNVとの関係」

佐久間春夫（国士館大学）

「CNV反応様式からみた陸上競技の種目特性」

平工志穂（穀女子大学）

正木氏は、弾道的な力の表出課題において、目標値が明確に設定された場合（目的課題条件）の準備電位の後期成分の振幅は、目標値の設定されない場合（無目的課題条件）の振幅よりも大きくなること、また目的条件では、反復練習に伴い、準備電位の立ち上がり時期が早くなるという実験結果を示され、その理由は、運動に目的性が加わると課題遂行に対する注意や動機づけが高まるからだ、と解釈された。脳波の解析を通して運動学習の過程を明らかにしようとする試みが増す中で、示唆に富んだタイムリーな話題であったが、後期成分の電位の差は、運動プログラム作成の困難度といった反応システム内での処理の差を反映している可能性があるのではないかと、という印象を持った。

佐久間氏は、予告反応課題において、反応時間の変動には一定の規則性があり、ほぼ90分から120分の周期で反応の遅速が交替すること、さらに前頭部と中心部のCNV電位の増加は反応時間の短縮と密接に関係していることを報告された。生体リズムについて予備知識を持っている者でさえ、データが示すその支配力に驚きを禁じ得なかった。万事にindependentでありたいと考える筆者など、「その制約から解放されるてだては？」と、ついつい頭の中で先を急いでしまった。ただし、時間経過に伴って反応時間の変動の幅が小さくなる傾向について、説明を伺う時間的余裕がなかったことが悔やまれた。

平工氏は、陸上競技の短距離選手と長距離選手を対象として、単純反応課題遂行時のCNV反応パターンを比較したところ、短距離選手は長距離選手より反応時間が短いこと、また初期成分、後期成分のいずれにおいても、短距離選手は長距離選手よりも大きな電位を示すこと、を明らかにされた。さらにCNVの反応様式から種目間の心理的スキルの差を捉えることの可能性について言及された。

演題番号 031011～031013

荒木雅信（大阪体育大学）

「障害をもつ生徒における系列反応特性」

乾 信之（鳴門教育大学）

「一致タイミング要素を含む aiming 動作の時間的-空間的変動」

工藤和俊（中京大学）

「動作がパフォーマンスに及ぼす影響-自転車ペダリングの有無による選択反応時間の
変化に注目して-」

鍋谷 照（日本体育大学）

乾氏は、養護学校高等部の自閉症、ダウン症および精神遅滞の生徒の系列情報処理の特性を実験的に検討し、精神遅滞の生徒は健常者に近い系列情報処理を行い、他は系列情報処理を行っていなかったという結果を報告した。これに対して、伊藤政展氏（上越教育大学）は、これら障害をもつ生徒が系列光刺激の追従課題を正確に理解していたかについて質問があった。この点が明確に統制されれば、研究はさらに発展すると思われる。

工藤氏は、一致タイミング事態における急速照準動作について、速度と動作の観点から空間的-時間的な正確さについて、インパルス-変動モデルなどから検討し、aiming動作に一致タイミング要素が加わると動作の空間的-時間的変動は大きくなり、インパルス-変動モデルを条件つきで支持されると報告した。この結果を基に実際の運動について、その作用機序が説明されることが今後期待される。

鍋谷氏は、自転車ペダリング時における運動動作が、選択反応時間に及ぼす影響について実験的に検討したが、運動動作が選択反応時間のパフォーマンスの低下要因とはならなかった。この点について、吉川政夫氏（東海大学）は、Donders（1868/1969）の課題の分類からの検討を提案した。この研究は、発表者がここ数年手がけてきた研究であり、統合的な結論が楽しみである。

演題番号 031014~031017

滝 省治（甲子園大学）

「身体活動に対する態度の日中における差異-体育専攻生による比較-」

郷 小京（京都教育大学研究生）

「中・高齢者の運動継続を規定する要因（1）-包括的運動行動モデルの作成-」

中込四郎（筑波大学）

「中・高齢者の運動継続を規定する要因（2）-運動実施タイプ別の検討-」

樋上弘之（筑波大学大学院）

「激しい運動に伴う感情の変化とランニング実施との関係」

橋本公雄（九州大学）

「身体活動に対する態度の日中における差異」

ケニヨンの身体活動に対する態度尺度をモデルに、態度項目を作成して、日中比較分析をした。女子の項目分析において、最大の因子負荷を示す第1因子を省略したことに質問が集中した。中国の教育目標の中で、知育、徳育、体育の他に美的経験を重要視していることが日本と大きな差が認められたところである。

「中、高齢者の運動継続を規定する要因（1・2）」

健康観等の「認知・情動要因」、経済的・時間的要因等の「外的要因」、運動経験等の「先行要因」の3要因についてマニュアル化された面接聞き取り調査を行っている。調査対象者のスポーツ実施に関する行動を包括的に捉えようとする試みである。研究1においては、行動モデルを提示して運動実施様態を4タイプに分類した。研究2では運動実施タイプ間の認知的要因得点を比較している。運動行動規定要因モデルに対して活発な質疑が行われた。実施タイプ別の比較においては対象者が少ないのではないかと批判がみられた。

「激しい運動に伴う感情の変化とランニング実施との関係」

運動による不安低減効果に対して対象者の運動経験による差を検討しようとする試みである。運動負荷を実験室的に厳密に押さえた意欲的な研究であった。快感情とリラックス感にランニング経験の差が認められた。二要因分析中の交互作用についての検討に質問があった。

演題番号 031P01～031P03

岡村豊太郎（山口大学）

「運動イメージ想起中の生理反応の変化と時間感覚－運動イメージ評価の試み－」

有路義敦（早稲田大学大学院）

「陸上競技種目における競技イメージの時間認知」

中宮敏之（日本学術振興会特別研究員）

「各種スポーツ選手のボディ・イメージについて」

山根雅子（大阪体育大学大学院）

有路義敦らは、「運動イメージ想起中の生理反応の変化と時間感覚」と言う実験研究を報告した。研究目的は、イメージを客観的に評価し得る指標を特定する手懸かりを得るということであった。

400m走と800m走を専門とする競技者8名を対象にして、400m走の競技イメージを描かせ、精神生理学的手法によるイメージ想起時の生理指標の変化、質問紙法によるイメージの明瞭性の測定を行なった。課題に要するイメージ時間と競技時間との比較もおこなった。その結果、①イメージ想起についてSNS活動の賦活がみられる、②スタート時の呼

「一致タイミング要素を含む aiming 動作の時間的－空間的変動」

工藤和俊（中京大学）

「動作がパフォーマンスに及ぼす影響－自転車ペダリングの有無による選択反応時間の
変化に注目して－」

鍋谷 照（日本体育大学）

乾氏は、養護学校高等部の自閉症、ダウン症および精神遅滞の生徒の系列情報処理の特性を実験的に検討し、精神遅滞の生徒は健常者に近い系列情報処理を行い、他は系列情報処理を行っていなかったという結果を報告した。これに対して、伊藤政展氏（上越教育大学）は、これら障害をもつ生徒が系列光刺激の追従課題を正確に理解していたかについて質問があった。この点が明確に統制されれば、研究はさらに発展すると思われる。

工藤氏は、一致タイミング事態における急速照準動作について、速度と動作の観点から空間的－時間的な正確さについて、インパルス－変動モデルなどから検討し、aiming動作に一致タイミング要素が加わると動作の空間的－時間的変動は大きくなり、インパルス－変動モデルを条件つきで支持されると報告した。この結果を基に実際の運動について、その作用機序が説明されることが今後期待される。

鍋谷氏は、自転車ペダリング時における運動動作が、選択反応時間に及ぼす影響について実験的に検討したが、運動動作が選択反応時間のパフォーマンスの低下要因とはならなかった。この点について、吉川政夫氏（東海大学）は、Donders（1868/1969）の課題の分類からの検討を提案した。この研究は、発表者がここ数年手がけてきた研究であり、統合的な結論が楽しみである。

演題番号 031014～031017

滝 省治（甲子園大学）

「身体活動に対する態度の日中における差異－体育専攻生による比較－」

都 小京（京都教育大学研究生）

「中・高齢者の運動継続を規定する要因（1）－包括的運動行動モデルの作成－」

中込四郎（筑波大学）

「中・高齢者の運動継続を規定する要因（2）－運動実施タイプ別の検討－」

樋上弘之（筑波大学大学院）

「激しい運動に伴う感情の変化とランニング実施との関係」

橋本公雄（九州大学）

「身体活動に対する態度の日中における差異」

ケニヨンの身体活動に対する態度尺度をモデルに、態度項目を作成して、日中比較分析をした。女子の項目分析において、最大の因子負荷を示す第1因子を省略したことに質問が集中した。中国の教育目標の中で、知育、徳育、体育の他に美的経験を重要視していることが日本と大きな差が認められたところである。

「中、高齢者の運動継続を規定する要因（1・2）」

健康観等の「認知・情動要因」、経済的・時間的要因等の「外的要因」、運動経験等の「先行要因」の3要因についてマニュアル化された面接聞き取り調査を行っている。調査対象者のスポーツ実施に関する行動を包括的に捉えようとする試みである。研究1においては、行動モデルを提示して運動実施様態を4タイプに分類した。研究2では運動実施タイプ間の認知的要因得点を比較している。運動行動規定要因モデルに対して活発な疑問が行われた。実施タイプ別の比較においては対象者が少ないのではないかと批判がみられた。

「激しい運動に伴う感情の変化とランニング実施との関係」

運動による不安低減効果に対して対象者の運動経験による差を検討しようとする試みである。運動負荷を実験室的に厳密に押さえた意欲的な研究であった。快感情とリラックス感にランニング経験の差が認められた。二要因分析中の交互作用についての検討に質問があった。

演題番号 031P01～031P03

岡村豊太郎（山口大学）

「運動イメージ想起中の生理反応の変化と時間感覚－運動イメージ評価の試み－」

有路義敦（早稲田大学大学院）

「陸上競技種目における競技イメージの時間認知」

中宮敏之（日本学術振興会特別研究員）

「各種スポーツ選手のボディ・イメージについて」

山根雅子（大阪体育大学大学院）

有路義敦らは、「運動イメージ想起中の生理反応の変化と時間知覚」と言う実験研究を報告した。研究目的は、イメージを客観的に評価し得る指標を特定する手懸かりを得るということであった。

400m走と800m走を専門とする競技者8名を対象にして、400m走の競技イメージを描かせ、精神生理学的手法によるイメージ想起時の生理指標の変化、質問紙法によるイメージの明瞭性の測定を行なった。課題に要するイメージ時間と競技時間との比較もおこなった。その結果、①イメージ想起についてSNS活動の賦活がみられる、②スタート時の呼

吸曲線にイメージの内容を示すと思われる特異な曲線が現われる、③明瞭性の高い被験者は時間感覚が高い傾向を示す、④各区間の時間配分では後半部分の区間が長くなる、⑤イメージに伴う時間感覚はイメージの明瞭性によって変化する、等の結果をえている。そして、その結果から生理指標と時間感覚、イメージの明瞭性は、単独もしくは組み合わせることによってイメージの内容を評価できる、と結論している。

中宮敏之らは「陸上競技種目における競技イメージの時間認知」という実験研究を報告した。これは、競技時間が異なる種目間で、その競技特性を背景とした競技イメージにおける時間認知を比較し、それに及ぼす内的イメージ想起と外的イメージ想起の有効性を検討したものである。男子40名、女子20名の100m、400m、110mハードルの専門競技者を対象にして、それぞれの専門種目について閉眼状態で自己最高記録をマークしたときのイメージを想起させ、その所要時間を測定した。測定は各被験者とも内的イメージ条件と外的イメージ条件をそれぞれ10試行ずつ行った。その結果、正確な時間評価をした者は先行研究の結果とは異なり、外的イメージ想起によっていた。また、内的イメージ条件において110m Hの方が時間評価が正確であった。110m Hではハードル間の歩数を決めているがこれが影響していると考えられた。

山根雅子らは、「各種スポーツ選手のボディ・イメージについて」報告した。これは、ボディカセクシスとスポーツ種目の関係を検討したものである。The Secord-jourard Body Cathexis Test を参考にして40の質問項目と、評定尺度を作成し、これをダンス71名、新体操103名、剣道・なぎなた35名、陸上競技37名、バスケット84名、サッカー71名、水泳21名、計422名の女子運動クラブ員に実施し、因子分析を行ったものである。その結果、全調査対象により抽出された因子は、第1因子：容貌的カセクシス、第2因子：下肢機能的カセクシス、第3因子：生理的カセクシス、第4因子：体幹的カセクシスの4因子であった。各スポーツ群では、ダンス群、剣道・なぎなた群、バスケット群の3群について因子が抽出されたとしている。そして、それぞれのスポーツ群の因子構造を紹介している。

<座長のきづき、感じ>

1. 少ないデータで結論がかなりはっきりと出されている。
2. イメージに関する実験では実験条件に保持の条件が混入されている。
3. 因子分析に関しては項目数にたいして少ない被験者数で実施して結論を導いている。
4. 先行研究がよく読まれていない。

「大筋的系列動作のモデリングにおけるモデル提示角度の影響

－対面モデル観察時の反転操作方略－

石倉忠夫（中京大学大学院）

「視覚的干渉課題を用いた運動技能の習熟段階の検討」

伊藤友記（中京大学）

「ポリリズム(3:2)の習得ストラテジーが保持と転移に及ぼす影響」

若林文子（広島県立保育専門学校）

石倉氏は、大筋的系列動作のモデル提示と技能習得の問題に関し、対面あるいは背面モデル提示に対する再認・再生テストを用いた実験結果から長期記憶と作業記憶間の記録・検索過程を考察している。概略は、学習者に要求される課題が再認か再生かによって最も適切な提示方法が異なるといった結果であったが、もしこの研究の目的が、現場における問題解決を主眼としているのではなく、モデル提示と技能習得にかかわる記憶検索の仕組みを明らかにしようとするものであれば、今後はより緻密な条件設定を考える必要があるとの印象を抱いた。

伊藤氏は、視覚干渉課題による運動技能の習熟段階の検討結果報告であるが、細かい事をぬきにして言えば、筋感覚と視覚のかかわりという時代をリードする先見的な問題を内包するテーマを取り扱っていると言える。しかし、単純に考えても、筋感覚と視覚間の干渉ではなくむしろ統合の観点、二重課題における注意的・自動的処理の問題、さらに二重課題における大脳半球間のcross-talkの観点など、解決すべき問題が多く含まれており、今後の研究方略の絞り込みが必要と思われる。

若林氏は、ポリリズム(3:2)の習得ストラテジーとその学習効果に関する研究で、異なるリズムの左右手動作学習では統合組織化学習が並列組織化学習よりも学習効果が高いという報告であった。この研究は現場でのリズム学習に端を発しているとのことであったが、それにとどまらずリズム学習のメカニズムを探る方向へと発展することを期待したい。細部に言及すれば、左右間の比較検討について拍子と手の要因が明らかに混同されており、その実験結果の解釈には疑問が残る。さらに踏み込めば、こういったリズム課題には大脳半球優位性の関与も十分考えられ、この点からの左右差の検討も問題解決の一助となるのではないだろうか。

演題番号 031P07～031P09

筒井靖次郎（愛知教育大学）

「練習による逆上がり動作の再現性増加と動作意識の変化」

麓 信義（弘前大学）

「年齢が練習の多様性効果に与える影響」

山西正記（広島大学研究生）

「動作法による立三段跳び及び垂直跳びの記録の向上について」

佐藤正志（順天堂大学）

麓氏らは、発表において、「とりあえず、単に練習させただけではうまくならないということを書いたかった」と述べていたが、それだけではやはり寂しいと思った。フロアーから指摘があったように、逆上がりができるような練習プログラムを与えた場合に、どのような動作変容、意識変化があったかを今後報告してもらいたい。ただ、従来からの運動学習の知見を体育授業の現場に取り組もうとする点には、大いに期待したい。

山西氏らの発表はpractice variabilityの発達差に関する研究であるが、この研究の独自性は、学習プロセスの検討に際して筋電図といった生理学的指標を採用したことである。「変動している時期こそ多様性練習が必要である」という結論であった。方法論に魅力を感じたが、すでにスキーマを完成させている大人が、スキーマ完成途中の9歳児や12歳児よりも成績が悪いという根本的問題について、どう解釈するのであろうか。

佐藤氏らの発表は動作法の具体的方法に関する質問が多かった。従来の指導法があまりにもトレーニング方法に意識を置きがちで、リラックスした正しい動きに関する視点が欠落しがちであっただけに興味深かった。ただ、フロアーから指摘があったように、今回のデータで、結論じみたことは言うには多少無理があるかもしれない。たとえば、ウエイトトレーニングをしていなくても、この時期であれば、走り込みや跳び込みの時期であるだけに、筋力トレーニングを行っていないとはいいがたいと思われる。また、跳躍テクニックの学習効果が生じている可能性も否めない。その点を明らかにするためには、統制群を設置した追研究が必要と思われる。次回の発表を待ちたい。

演題番号 031P10～031P12

山内正毅（長崎大学）

「スポーツ・運動場面における錯覚の分類の試み」

兄井 彰（福岡大学）

「教員志望学生における運動の自己知覚について(2)－課題未達成者の原因の認識と対処について－」

叶 俊文（皇学館大学）

「M. ヴィグマンの“スキッツェ”に関する一考察－ALKESTIS’について－」

朴 淳香（日本女子大学）

兄井氏の発表は、スポーツ場面に特有な錯覚をアンケート調査、収集し、KJ法を用いて分類するとともに錯覚に関与する要因を明らかにしようとした。結果は921項目の錯覚を12カテゴリーに分類し、関連要因を明らかにした。競技場、器具等の大きさ、色、明るさ

などによる運動パフォーマンスへの影響についての先行研究はかなりあると思われる。フロアーからの意見としても出ていたが、このような錯覚が運動パフォーマンスへどのように影響するのか、十分なレビューを行った上で検討していただけたらと思う。叶氏の発表は、学生の講義や練習を通して目的の運動課題をどの程度認識しているのか、また、課題の未達成者に対してどのような指導を行えばよいと考えているのかを調査し、その内容を上位群（早期課題達成者）と下位群（補習を行い再テストを繰り返した後課題達成した者）で比較した。その結果、課題の認知では付加練習を行った下位群において具体的内容の表出が顕著であった。このことから、簡単に課題を達成してしまう者よりも、失敗し、苦勞して達成した者の方が問題点等がよく認識できるという主張だと思われる。ただ、本研究結果は、下位群の学習量が多くなっているため、その結果があらわれたとも解釈できる。また、今回の発表では示されていないが、上位群だから認識できるといった事柄（運動のコツのようなもの）もあるのではないかという感想を持った。いかがであろうか？ 朴氏の発表は、M. Wigmanの“スキツェ”より“アルチェステ”を取り上げ、Wigmanの創作過程上に生じる心理的推移を図像的、言語的側面から探るとともに、Wigmanの感情表出が“スキツェ”にどのように反映されているかを検討した。感情表出語の使用率を分析し、創作者の作品意図を探ろうとしているが、感情表出語の使用率と創作者の感情の変化や意図との関係や、この分析と抄録の結論とがどのように結びつくのかといった点について、私の勉強不足もあって難解であったように思う。

演題番号 031P13～031P16

久保玄次（愛媛大学）

「WFPTによるパーソナリティの研究－男子スポーツ選手とダンサーの特性－」

林 信恵（大坂体育大学）

「運動選手の競技引退に関する研究－自我同一性の再形成をめぐって－」

豊田則成（筑波大学研究生）

「スポーツクラブ経験が日常生活の心理的対処能力に及ぼす影響」

徳永幹雄（九州大学）

「大学運動部員における問題行動の典型例の検討」

竹之内隆志（名古屋大学）

林氏らは適応性、芸術性、運動感覚、知性、個性、女性性、創造性などの尺度からなるテスト（WFPT）により、モダンダンスのダンサーのパーソナリティの特徴について、芸術性、創造性、個性、独創性が他の16種目の男子スポーツ選手と比較して高い傾向が認められ、また想像タイプ、直感タイプ、勤勉タイプ、知的タイプの4類型についてみた場合に、

ダンス、新体操、サッカー、水泳、陸上の選手が相対的に顕著な特徴がみられたと報告した。対象者を増やしてさらに検討することであった。

豊田氏らはトップアスリートの競技引退に関連するプロセスの事例報告と、面接法とWho am I テストの結果から7事例を競技引退後の社会生活における適応状態を自我同一性再形成の観点から、「再達成型」、「軌道内安定型」、「停滞・妥協型」、「模索型」、「不安・防衛型」の5つのタイプに分類し、これらの同一性再形成地位間の差について報告した。この種の問題についての実証的研究は極めて少なく、今後の研究が期待される。

徳永氏らはスポーツクラブ経験が日常生活の心理的対処能力に及ぼす効果について、「心理的競技能力診断検査」の各質問項目を日常生活に対応するように変更を加えた質問紙を用いて、大学生を対象に調査し、以下のような結果を報告した。男子においては小学校と大学、女子は大学でスポーツクラブを経験をした者が優れ、長期間継続している者ほど優れていた。小学校時のスポーツクラブの主観的運動量が多い者ほど優れていた。スポーツに対して好意的態度が形成されている者ほど優れていた。また運動量が多くなると忍耐力が優れ、スポーツに対して好意的態度が形成されている者ほど安定・集中、自信にも優れていた。フロアーの関心が高く、質問も多かった。

竹之内氏は集団の形成・維持や集団成果の向上を妨害する成員の問題行動の典型例を抽出するために、大学運動部員を対象に、予備調査によって得られた67項目について、不快感を感じる程度、競技成績への影響度、チームの雰囲気への影響度の観点から4件法による調査を実施した。

不快感の項目得点の平均値が3（やや不快）以上の項目50項目について、競技成績への影響度得点とチームの雰囲気への影響度得点のそれぞれについて主成分分析・バリマックス回転を実施し、それぞれ6因子が抽出された。競技成績とチームの雰囲気の各因子をクロスさせ、二次元的に捉え、問題行動の典型例として次の6タイプを明らかにした。①他者の意欲の減退をも招く未成熟な技能向上意欲の欠如した行動。②個人に限定された技能向上意欲の欠如した行動。③責任を転嫁させ、他罰的で自己中心的な未成熟な行動。④合理的な部の運営に対する非協力的行動。⑤上級生の封建的行動。⑥下級生の非従順的行動。

演題番号 033001～033004

中込四郎（筑波大学）

「音楽聴音時に伴う自由テンポの足踏み動作時の生理心理的变化」

平井タカネ（奈良女子大学）

「他者の動きに伴う関係空間の変容」

藤井千恵（奈良女子大学）

「対人恐怖が背景にあった女子選手とのカウンセリング（第2報）－治療者がコーチを兼ねて成功した事例－」
鈴木 壮（岐阜大学）

「ダンスムーブメントセラピーによる事例－頭痛・胃痛・下痢症状をもつダンサーへのアプローチ－」
高安マリ子（マリダンスシアター）

「音楽聴音時に伴う自由テンポの足踏み動作時の生理心理的变化」

精神科の患者さんの治療の一助としてダンスやリズム運動を用いてきた発表者らの経験から、研究が始まっている。今回の報告では、4種類の音楽の聴音と、続いて聴音しながら自由なテンポで足踏みをさせた場合の生理心理的影響（GSR・呼吸数および不安特性）を検討した。

「他者の動きに伴う関係空間の変容」

同一空間内の他者身体との関わり方が、どのように自己に語りかけられ、内面的な情動の変化に影響を与えているのかを明らかにするために、他者の動きに伴う関係空間の変容を指標として、2つの実験的な検討を行った。それらの実験を通じて、他者との関係空間に影響を及ぼす「象徴としての身体」の表現的特性を明らかにしている。

「対人恐怖が背景にあった女子選手とのカウンセリング（第2報）－治療者がコーチを兼ねて成功した事例－」

サブタイトルにもあるように、本事例はコーチと治療者が同一人（発表者）であることを特徴としていた。また、共同研究者がスーパーバイザーの立場からコメントを行った。本事例報告からは、クライアントの競技場面での問題と内的な課題の同期が言語レベルで示されることが明らかにされた。

「ダンスムーブメントセラピーによる事例－頭痛・胃痛・下痢症状をもつダンサーへのアプローチ－」

発表者にとって、本事例は本格的なインテンシブのダンスムーブメントセラピーを行ったイニシャルケースとのことである。そして、体育心理学領域での発表もまた初めてであった。クライアントは発表者の主催するダンスシアターのスタッフの一人であり、種々の身体症状を訴えており、そこでの治療過程が報告された。

これらの4演題に共通するのは、体育・スポーツの臨床的問題への基礎ないしは応用的取り組みということになる。与えられた発表時間では、紹介やその後の討議をじっくり行うことができなかった。

演題番号 033005～033007

阿江美恵子（東京女子体育大学）

「パーソナル・スペースに関する研究－競技種目特性が対人距離に与える影響について－」
庄司暢道（東海大学付属本田記念幼稚園）

「対戦相手に関する情報収集の利点と問題点」
三木ひろみ（筑波大学）

「PM型リーダーシップと戦績での強さ、練習参加、集団魅力との関係－高等学校ラグビー部における権限構造を中心に－」
林 正一郎（同志社大学・高等学校）

庄司先生は、対人コミュニケーションの際に各個人が有する他人には目に見えない空間であるパーソナル・スペースを大学生競技者を対象として実験的に比較検討した。競技種目、性格（神経質、内外向）、性の4要因からの分析であった。結果は、種目、パーソナリティによる違いはほとんどなく、目標人物が自分と同姓であるか否かが目標人物に接近するかどうかを決める要因になることが見出された。フロアーからは、種目人数の内訳はどうであったか、目標人物の服装、特に着衣の色が接近度に関連するのではないか、目標人物が坐位である理由は、という3つの質問がなされた。目標人物を判定する手掛かりがどこにあるのかというのが論点であったようだ。

次に、英国在中の三木先生に替わって西野先生（筑波大学）が対人競技における対戦相手に関する情報収集活動の実態について発表した。スポーツ選手が相手の情報をどの程度収集しているのかがわかり興味深かった。フロアーからは部内の情報の量の違いについて指摘する意見が出された。

最後は林先生が、高等学校ラグビー部を対象として、PM型リーダーシップと競技成績、集団魅力との関係について発表した。座長からラグビーチーム像をどのように捉えているかを質問した。3年がかりの大きなデータを扱った研究は評価される。発表内容を限定した方が理解しやすかったと思われる。

セッション全体としては、共通の話題ではなかったため、討論が盛り上がらなかったのは残念であった。

演題番号 033008～033011

鈴木 壮（岐阜大学）

「スポーツ障害が心理に及ぼす影響」
須藤好子（筑波大学）

「空手道における現実療法についての一考察」
橋爪章一（ユニバーサル空手道連盟信愛会）

「剣道選手の試合直前のコンディショニング－試合で実力発揮できる選手とできない選手との比較－」
松村悦博（日本大学）

「メンタルトレーニングでの経験が競技の中で生かされるまで」
高橋幸治（筑波大学）

「スポーツ障害が心理に及ぼす影響」は、題が研究内容と少し異なり、スポーツ障害後の心理状態と状況要因との関係についての報告のようだった。研究方法上の問題があることが感じられたが、スポーツ障害後の心理状態への環境・状況要因の影響について注目したことが重要と思われた。

「空手道における現実療法についての一考察」は、心理技法のひとつである現実療法を実際の指導場面に適用して一定の成果が見られたという報告であった。実際の指導のなかで現実療法を活かそうという試みであり、一考に値するものと思われた。今後、現実療法を取り入れた指導の具体的な流れの一端、一事例の詳細な内容についての報告を加えることが望まれる。

「剣道選手の試合直前のコンディショニング－試合で実力発揮できる選手とできない選手との比較」は、試合で実力発揮できる選手とできない選手を試合時の心拍数、試合直前の状態不安について比較していた。試合で実力発揮できる選手とできない選手を生理指標と心理指標で調査しようとすることは試みとしては理解できるものであるが、調査対象数の少なさ、状態不安の調査時期・回数的问题などが残されているように感じられた。

「メンタルトレーニングでの経験が競技の中で生かされるまで」は、約2カ月半のメンタルトレーニング講習会に参加した選手に対して、その講習会時から終了後のフォローアップの時期まで競技状況での心理的変容の事例を報告したものであった。選手と非常に良い関わり方をしたことが感じられた。もう少し詳細に聞いてみたいと思った。また、この報告は、メンタルトレーニングが講習会のようなある一定の期間で終わるわけではなく、選手によってはその後も継続する必要がある、つまり一定の成果を現われるまでには選手個人によってトレーニング期間が異なることをも示していると考えられる。

全体的に、演題によっては発表時間が短いように感じられるものがあつた。今後の改善が望まれる。

演題番号 033P01～033P04

和田 尚（京都教育大学）

「幼児の運動遊びに対する性度の認知と有能感との関係」 岡沢哲子（大手前女子短期大学）

「体育授業における目標の志向性が学習態度に及ぼす影響」 田口多恵（国学院大学）

「ゴルフの授業によるゴルフへの理解や態度の変化－女子大学における保健体育実技の事例を中心に－」 種村紀代子（京都女子大学）

「体育系大学生の人柄と精神健康度の変化についての一考察－特に陸上競技の指導を通して見た変化－」 呉 萬福（国立台北師範学院）

「幼児の運動遊びに対する性度の認知と有能感との関係」

幼児の運動遊びに対する性度の認知が、運動場面の有能感の認知過程に及ぼす影響について調べられた。有能感と遊びへの性度の認知の測定を別々に行い、それらの関係が分析された。その結果、幼児は運動遊びに対して性役割にしたがった性度を認知していることと、男らしい遊びに対しては男児の有能感が高く、女らしい遊びに対しては女児の有能感が高いことが明らかになった。質問は、性度の認知の測定で行われた絵カードの順位づけの幼児にとっての可能性、信頼性についてなされた。

「体育授業における目標の志向性が学習態度に及ぼす影響」

マスタリー志向とパフォーマンス志向に関する志向性尺度を作成し、次に、目標の志向性が授業態度にどのように影響しているかが調べられた。分析の結果、授業態度の行動的側面、認知・感情的側面において、志向性との関連が示された。まとめとして、生徒を理解するうえで目標の志向性のような質的アプローチの必要性が提案された。発表に対して、授業の内容や指導の仕方と関連づけて検討することの必要性が指摘された。

「ゴルフの授業によるゴルフへの理解や態度の変化－女子大学における保健体育実技の事例を中心に－」

ゴルフの授業を通してゴルフに対する意識の変化を調べることが目的であった。同一教官のもと7～8週のゴルフ授業を行ない、前後に質問紙による意識調査を行った。結果として、ゴルフへの価値意識、スポーツとしての評価意識、イメージ、レジャー的要素、の各因子でプラスの変化が示された。質問として、授業での指導内容との関連が示されていないこと、授業前後の比較の統計上の問題点が指摘された。

「体育系大学生の人柄と精神健康度の変化についての一考察－特に陸上競技の指導を通して見た変化－」

一学期の陸上競技の授業を通しての変化を、U-KテストとY-Gテストを用いて調べた結果、国立台北師範学院の一期生の傾向が明らかになった。また、授業を通して精神健康度の上昇が示された。発表に対して、日本人に対して標準化されている両テストを、外国人に用いる場合に問題があるのではないかとの質問があった。

演題番号 033P05～033P07

石井源信（東京工業大学）

「系列パターン学習の系列位置に対する秩序パラメータ“ゆらぎ”の変化」

調枝孝治（広島大学）

「動作の精神作業負担－NASA-TLXの検討－」

須田和也（日本体育大学）

「屋内スポーツ施設環境評定尺度の開発－体育館の総合評価を規定する施設要因の分析
検討－」
吉川政夫（東海大学）

調枝氏の「系列パターン学習の系列位置に対する秩序パラメータ“ゆらぎ”の変化」についての発表は、系列パターンの追従学習を適応制御過程で行うと見越し反応の増大と見越し反応時間の「ゆらぎ」の増幅がみられた研究にひきつづきなされたものであり、各系列位置でフィードバック制御過程よりも見越し反応を強調した自己組織制御過程での「ゆらぎ」の増幅が系列全体にわたって秩序パラメータの増大を生起させていることを確認したものである。（座長の立場で十分な理解ができておりませんので意見・感想はありません。）

須田氏の「動作の精神作業負担」についての発表は、往復タッピング課題を用いて主観的な精神的作業負担に依存する6つの項目（NASA-TLX）を一対比較で重みづけをし、統制条件（運動課題のみ）と二重課題条件（音信号の選択反応課題）での作業負担と成績について検討を加えたものである。作業の困難度は同じでも精神作業負担が違う状況では、負担が大きい条件では副次課題よりその作業そのものの成績に影響を及ぼす傾向があるということである。このことは多忙感が増加するとともに副次課題の成績が減少するという報告とは逆の傾向になっているということであるが、それは2分間という作業時間の影響が大きいのではないか。

吉川氏の「屋内スポーツ施設環境評定尺度の開発」については、体育館の総合評価（スポーツ施設としての総合的な良しあしの評価）を使いやすさ、快適性、安全性を考え併せて7段階で評定させたものと、総合評価を規定する要因24項目（施設の構成要素）を重回帰分析で検討したものである。24項目を採用した場合と因子分析による6因子を採用した場合との比較において、24項目で総合評価をかなり正確に予測できるという報告であった。ただシャワー室や音響、換気などがマイナスとしてでているのはどう考えればいいのか。また、評価基準が使いやすさ、快適性、安全性を考えあわせて評価するものであるが、心理学的研究に位置づけるならば、それらに加えて外観性などを各観点で評価するのはどうか。

演題番号 033P08～033P01

鶴原清志（三重大学）

「大学運動部員にかかわるソーシャル・サポートの検討(1)－運動部活動における適応感との関連から－」
桂 和仁（武蔵丘短期大学）

「大学運動部員にかかわるソーシャル・サポートの検討(2)－バーンアウトとの関連から－」
土屋裕睦（筑波大学）

「ドロップアウト時期を規定する心理的要因」

筒井清次郎（愛知教育大学）

「青少年期におけるスポーツキャリアパターンを規定する心理的要因」

杉山哲司（山梨美和短期大学）

本セッションでは、4演題が発表されたが、内容的には2つに分けられるものであった。1つは、大学運動部員にかかわるソーシャルサポートに関して、サポートを受けた部員がどのように認知しているかという観点に重点を置き、適応感とバーンアウトから検討したものであった。もう1つは青少年のスポーツ参加に関する心理的要因として、結果予測、運動に関する有能感、勝敗に関する態度をとりあげ、ドロップアウトとスポーツのキャリアパターンの側面から検討したものであった。

学会最終日の最後のセッションにもかかわらず、比較的多数の参加があり、有意義なセッションであったと思われる。質問の時間は、4つの演題終了後にまとめて行うように配分されていたため、発表後にそれぞれの演題に対して、まず、発表順に質問を受け付ける形式で行い、その後に自由に質問を受け付けた。

前者の発表に対しては、研究で用いた質問紙に関して、それぞれの質問紙の内容の関連性に関すること、ソーシャルサポートの送り手の1つである指導者の性差に関する質問があった。後者の発表に対しては、質問紙の得点化の方法、キャリアパターンの分類に関するもの、結果予測の予測性に関する質問があった。しかし、この中のいくつかの質問は座長からの質問であり、また、発表に対しての今後の方向性という観点からの意見が見られなかったことが少々残念であった。

質疑応答に関して、1つのセッションをまとめてしまうと、どうしても特定の発表に片寄ることがあり、均等にと考えると座長の質問が多くなってしまうことになる。今回のように内容的に2つに分けられる場合は、内容ごとに質問時間を設定しても良いのではないかと考えられた。また、十分に論議をしようとする場合、やはり時間の制約があるので、ポスター発表の形式を導入することも必要であると考えられた。

5. 大会参加感想

第45回日本体育学会山形大会に参加して

渡植理保（岐阜県スポーツ振興事業団）

東京から3時間なら乗ってみようかな…そんな気持ちで山形新幹線に乗り、10月3日山形へ向かいました。福島までは快調にとぼしていた「つばさ」でしたが、福島から先はちょっとスピードダウン。特急と変わらなくなっちゃいましたが、踏切のある新幹線ですからそれはしかたがないことでした。9月末の台風にも負けることもなく、しっかり枝についていたまだ少し青さの残る林檎をぼんやり眺めていると、もうそこは山形でした。学会前日に開催された体育心理専門分科会プレセミナーに参加するため、駅から急いで山形大学に向かいました。他の分科会はプレセミナーなんかないんだろうな～と思うと、私が主催したわけでもないのに、ちょっと得意な気分になっていて、自然と早足になっていました。ところが、キャンパスは学会の準備もほぼ終わっていて、思いのほかひっそりしていました。方向音痴なうえに周りに誰もいなかったので、セミナー会場に辿り着くまで「本当にここでいいのかな～」とすっかり不安になってしまいました。

プレセミナーは、堅苦しい感じはなくて、発表して下さっている先生方にはいつでも気軽に質問ができるような、アットホームと言うか、どこかのゼミで先生から話しを聞いているようなそんな雰囲気だったように思います。特に中込先生は、本当なら難しい内容であろう博士論文を、分かりやすく、面白くアレンジして話して下さいました。プレセミナーがもうそろそろ終わろうとしている頃、ふと後ろを向くと、始まった頃はパラパラ開いていた席がほとんどうまっていた。何となく嬉しい気持ちが出たのを今でも憶えています。

私は10月5日の夕方に臨床スポーツ心理研究会に参加しました。スポーツ心理、カウンセリングを現場で生かそうとしている先生方や、実際に選手の人達と接している先生方40人ほどが参加され、非常に有意義な情報交換ができたと思っています。私が知っている限りでは、同じ日に運動学習研究会も開催されましたし、その他にも学会期間中自主的研究集会在いくつも行われていたことと思います。日本体育学会のことを「同窓会」と言った人がいましたが、このような研究会に参加させていただいて、同じ興味を持つ人達がこれからはどんどん集まってきて、新しい「窓」を作っていけたらいいなあ…と思います。

山形のラ・フランスを食べたかったのですが、9月末の台風で多くが落ちてしまい、これから出荷されるものは値が上がるだろうと聞きました。岐阜の店頭にも先日ならんでい

ました。山形に行っていなければ、ラ・フランスとは気づかずに洋なしだと思って素通りしていただいでしょう（今でもラ・フランスと書いてなければ見分けはつきませんが…）。学会に行くと何かしら刺激を受けることができ、終わってからの数日間はとても意欲が高まります。この意欲をぜひ来年の学会まで持続させたいものだとつくづく思いながらこの原稿を書かせていただきました。来年の学会を楽しみにしています。



日本体育学会体育心理学専門分科会プレ・セミナー風景

Ⅲ. 日本体育学会第46回大会および関連学会の案内

1. 日本体育学会第46回大会

平成7年度の日本体育学会第46回大会は下記のとおり群馬大学で開催されます。体育心理学専門分科会としてもプレ・セミナー、懇親会、キーノート・レクチャー、シンポジウムと多彩な行事を組んでおりますのでご連絡致します。

日時：平成7年10月3日(火)・4日(水)・5日(木)・6日(金)

場所：群馬県民会館（メイン会場）

体育心理学専門分科会関係

- プレ・セミナー 10月3日(火) 会場 前橋商工会議所 竹の間
- 15：00 北欧・北米における体育心理学の動向
北米について 司会・演者 磯貝浩久（九州工業大学）
北欧について 演者 佐藤雅幸（専修大学）
- 15：40 運動とメンタルヘルス 司会 滝 省治（甲子園大学）
「A型行動パターンは運動によって変えられるか？」
演者 竹中晃二（岡山大学）
「ダンスセラピーと表現療法」 演者 平井タカネ（奈良女子大学）
- 16：40 メンタルトレーニング実習 司会 米川直樹（三重大学）
「気功を中心として」 講師 豊田一成（滋賀大学）
- 18：00 懇親会（別紙参照） 会場 前橋商工会議所3階第1委員会室

1日目 10月4日(水)

9：00-15：00 一般発表

2日目 10月5日(木)

キーノート・レクチャー(9：00-9：45)

テーマ 「認知とパフォーマンスにおける潜在学習の影響」

司会 森 司郎（東京学芸大学）

演者 村越 真（静岡大学）

シンポジウム（9：50-11：45）

テーマ 「新しい身体運動研究の視点—生態学的アプローチ」

司会 調枝孝治（広島大学）

演 題 佐々木正人（東京大学） 「状況的認知理論とアフォーダンス」
山本裕二（名古屋大学） 「視覚性運動制御について」

総 会（11：45-12：30）

3日目 10月6日（金）

9：00-12：00 一般発表

プレ・セミナー要旨

北欧・北米における体育心理学の動向

北米について

磯貝浩久（九州工業大学）

本プレ・セミナーでは、北米スポーツ心理学会（NASPSPA）、米国応用スポーツ心理学会（AAASP）での発表テーマ、及びJournal of Sport & Exercise Psychology, Journal of Applied Sport Psychology, The Sport Psychologist等の研究雑誌での最近の研究内容を手がかりに北米における体育心理学の現状を探ってみたい。

また、北米のスポーツ心理学の動向として、PsychologyとMotor Control and Learningの区別、応用スポーツ心理学の繁栄、Exercise Psychologyへの注目等があげられるが、ここでは研究のトレンドの流れを中心に研究動向についてみていきたい。

今後の研究動向を探るため、スポーツ心理学の各研究領域で著名な研究者の将来の研究に向けての提言を紹介したいと考える。

北欧について

佐藤雅幸（専修大学）

1994年のスウェーデンスポーツ界は、リレハンメル・オリンピックアイスホッケーにおいて金メダルを獲得、ワールドカップサッカー3位、デビスカップテニス準決勝において、P. サンプラス率いる強敵アメリカから大逆転勝ちをおさめ、決勝ではロシアを破り優勝というように活気に溢れるものであった。さらに最近ではゴルフ界でもスウェーデン旋風を巻き起こしているようである。なぜスウェーデン選手は強いのか？興味あるところである。

私は専修大学長期在外研究員として、ストックホルム体育大学・カロリンスカ研究所で

研究を行うことができた。さらにオレブロ大学で開催された、スウェーデン国内のメンタルトレーニング学会に参加することができた。「アトランタ・長野オリンピックに向けて」と題されたこの学会は現場のコーチと研究者がともに考え情報を交換する場として有効に活用されていた。今回はスウェーデンでの在外研究をとおして知り得たスポーツ事情および体育心理学の動向について話題を提供する。

運動とメンタルハウス

A型行動パターンは運動によって変えられるか？

竹中晃二（岡山大学）

A型行動パターン（TABP）は、心臓外科医FriedmanとRosenman（1974）によって紹介された虚血性心疾患の進行に関わる心理的構成概念である。TABPは通常、攻撃性、明白な競争心、時間切迫の慢性的感覚、焦燥感、短気、敵意などで特徴付けられ、虚血性心疾患との関連で議論されてきた。

TABPと運動の関係を語る時、私達は、相反する2つのイメージを持ってしまう。1つのイメージは、TABP傾向の強い中高年者が、競争や記録にこだわりすぎるあまり、前へ前へと前のめりで倒れていく時の苦痛にゆがんだ顔である。もう一つのイメージは、運動によってTABPが弱まり、しかも心疾患予防に役だっているニコニコ顔のジョガーである。

本セミナーでは、運動がTABP変容に効果的か否かを、過去の文献、またここ3年間行ってきた生理心理学的実験（縦断的研究、横断的研究、主観的運動強度から見た研究）の結果から考察してみたい。

ダンスセラピーと表現療法

平井タカネ（奈良女子大学）

アメリカを中心として、リズム運動やダンスなどの身体運動が精神療法として注目され、実践されるようになって約50年になる。近年これらの理論や技法などが紹介される中で、日本でも関心が高まり、教育の現場や精神科などでも実践の試みがなされ、成果の報告もみられるようになってきた。

リズムやダンスの特性としては、内面と関わる表現性、繰り返されるリズムに伴う運動

快（機能快）とカタルシス作用、非言語的であるがより直接的な交流などがあげられる。

私もこの数年、精神科などでグループや個人を対象として治療的視点から実践を試みている。今回は、これらの事例をもとに、身体表現運動の精神療法としての機能と効果について報告したいと思う。

メンタルトレーニング実習

気功を中心として

豊田一成（滋賀大学）

従来のメンタルトレーニングは、いわば精神統一的観点に立脚して推進されてきた。これは、デカルト以来の西洋哲学に拠点をおいた心身二元論の立場である。これらの効果はそれなりに評価しなければならない。一方、人間の行動が観念にとられているとするならば、東洋思想に拠点をおく心身一元論的観点からのメンタルトレーニングが考えられる。

つまり、精神の統一ではなく心身の統一をめざす手法である。これに精通すれば人間が潜在的に有する能力まで引き出すことが可能であろう。この潜在的能力の発現に貢献するのが「気」と考えられる。そこでスポーツのメンタルトレーニングに効果的であると考えられる「気功」に焦点をあわせて実習をまじえながら考察したい。

潜在学習 (implicit learning) と運動学習

村越 真 (静岡大学教育学部)

はじめに

熟練者は豊かな知識と技能を持っている。その多くは実践の経験の中で獲得したものであるが、これはしばしば明確に言語化できない。人工知能の分野でエキスパートシステムが行き詰まったのも、熟練者が優れたパフォーマンスの背景にある知識を明示化できなかったからである。文法や頻度情報の潜在的学習の研究が、言語化できる知識と言語化できない知識の区別に関する実験的な証拠を蓄積している。

潜在学習とは

典型的な実験パラダイムは次のようなものである。学習段階では、被験者に何らかの規則のもとで作られた複数の刺激が呈示される (例えば、文字Aの次にはXかCが来て、Xの次にはBまたはZがくるというようなもの) が、規則の存在は被験者には知らされていない。テスト段階になってこの規則が知らされ、新たに呈示された項目を規則への一致不一致によって分類することが求められる。被験者は項目を正しく分類できるにも関わらず、規則について明示的に言及することはできない。テスト段階では、明示的に規則性の判断を問うのではなく、選好その他の判断を求めることもある。この場合は、規則情報による判断の偏りが見られることが潜在学習の証拠とされている。

近年このような非方略的な学習現象が多岐に亘って報告されている (Johnson & Hashrer, 1987)。刺激の構造抽出や規則を意識しなくても学習は可能であり、時には規則があることを明示した方が学習が阻害されることすらある。またその知識は言語化することなく利用できる。非方略的モードは、環境の中にある複雑な刺激間の関係を学習する時には効果的である。なぜなら、方略的な学習モードは、複雑な環境下では、誤った注意が生じやすいからである。

運動学習に関する研究事例

Holyoak & Spellman (1993) によれば、潜在学習は、環境にある特性相関が、それを示す刺激提示により、学習意識なく学習され、それによって、完全に言語化できないものの、課題解決を改善する。一般的な潜在学習パラダイムは運動学習の研究にも有用であると思われる。なぜなら、

- 1) 運動学習課題の多くは、複雑な環境下での適切な刺激の把握とそれに対応した行動と

して考えることができる

- 2) 運動学習は、事例（試行）から非方略的に学習したものである
- 3) 学習完了後も、それを言語化した知識として報告できないことが多いからである。

運動学習に関する興味深い研究を二つ報告したい。第1は、モニター上でのボール捕捉のシミュレーション課題である。この研究では、画面上方から曲がりながら落ちてくるボールを画面下方で捕捉することが求められる。軌跡は画面中央付近である特徴を持つが、その特徴によって、画面下方で右に極端に軌跡が流れるかどうかは確率的に決まっている。その関係を学習し、また利用すれば捕捉はより容易になるはずであるが、規則を明示した群の方が、学習成績が悪かったのである。捕捉のためのジョイスティックの動きの分析から、明示群では前半の動きが少なく後半の動きが大きい。ずれという局所的な注意が、全体としての正確な運動動作を阻害しているものと思われる。

もう一つの研究は、学習モードとプレッシャーへの耐性に関する研究である。一般にプレッシャーのもとで成績が低下するのは、自己の内部に注意が向い、課題を意識的に行おうとするからである。明示的な知識を持っていない場合は、注意の向内化による課題成績の低下は抑えられるはずである。Masters (1992) の研究は、この仮説をゴルフのバッティングで検証した。顕在モードの学習では、パットについての言語化された知識を与え、潜在モードでは干渉課題のもとに実際のパットをおこなわせた。ストレスや獲得された知識のコントロールはおおむね成功していた。この結果、潜在学習では、初期の伸びは低いが、ストレス導入下でのパフォーマンスは高かった。

結語：教育と運動学習研究への示唆

現代の教育の中では「考えなさい」とか「工夫しなさい」という意識的な知識の利用が強調され、「直感」に頼ることはむしろ否定的に捉えられている。また認知心理学が主として対象としてきたのも、意識的な問題解決であった。スポーツを実践してきた我々は少なくとも経験上、意識できることだけが知識ではないことを知っている。実践の中で、無意識のうちに人は多くのことを学習し、知識を得ることができるはずである。潜在学習の研究がこうした疑問に実験的に答えつつある。

参考文献

- 1) Green, T.D., & Flowers, J.H. (1991). *J. of Motor Behavior*, 23, 293-300.
- 2) Johnson, M.K. & Hasher, L. (1987). *Ann. Rev. of Psy.*, 38, 631-668.
- 3) Masters, R.S.W. (1992). *Brit. J. of Psy.*, 83, 343-358.

運動制御の生態学的アプローチ

調枝孝治（広島大学総合科学部）

以下に問題設定の理由を述べる。

過去、体育心理学専門分科会のシンポジウムでは、何度か運動学習の諸問題がシリーズでとりあげられた経緯がある。しかし、その反動からここ数年は正面きって運動の制御や学習の研究発展を討議の対象にしてこなかった。

本来、ある研究領域が発展しているかどうかを見極めるには、その領域を支配している研究パラダイム論争の成熟度に注意を払う必要がある。これまで、どちらかという運動制御と学習の領域における支配的パラダイム論争の成熟度は低いとされてきた。しかし、最近の運動制御と学習に関する領域は少し事情が変わり、発展の速度には目を見張らせるものがある。

それは、この領域における研究成果の著しい発展を支えている支配的パラダイム論争が活発なためである。その支配的パラダイム論争とは、運動システムアプローチ（MOVEMENT SYSTEMS APPROACH）と行為システムアプローチ（ACTION SYSTEMS APPROACH）(Meijer & Roth, 1988)と呼ばれている。また、同じ内容だが、両アプローチの背景となっている学派や原理、それに分析対象となっている機構によって、以下の呼び方もされている。それらは、情報処理アプローチ（INFORMATION-PROCESSING APPROACH）とダイナミカル・アプローチ（DYNAMICAL APPROACH）、指示的アプローチ（PRESCRIPTIVE APPROACH）と創発的アプローチ（EMERGENT APPROACH）、それに認知的アプローチ（COGNITIVE APPROACH）と生態学的アプローチ（ECOLOGICAL APPROACH）などである。

今回のシンポジウムで、討議対象として運動制御の生態学的アプローチをとりあげた理由は、とくに若い会員の方々からの要望が多かったことがあげられる。その要望の内容としては、これまで体育・スポーツの領域で見聞きする情報処理・認知的アプローチの運動制御や学習のキーワード（Closed-Loop feedback, Open Loop, Motor programs, Plan, Schema, Image, Generalised motor program, Top-down, Representation, KR）に対して、生態学的アプローチで用いられるキーワード（Perception-action coupling, Affordance, Optical flow, τ , Visual control of Movement）は十分に理解されているとは思えない。

そのため、これらのキーワードの理解と同時にキーワードを生み出した生態学的アプロ

一チによる運動制御の研究成果を時間をかけて紹介してほしいというものであった。

それではということで、まずこの方面の研究をやっておられる会員さがしを始めたが、いざ発表となると適任者がいないということになった。そこで、最適任者として、生態心理学がご専門でしかも運動制御の研究に中心的な役割を發揮されておられる、佐々木正人先生（東京大学）をお願いすることになった。

さらに、視覚性運動制御の問題に対して生態学的アプローチと情報处理的アプローチから、若手会員の中から山本裕二先生（名古屋大学）に登場願うことにした。

重ねて言うが、今回のシンポジウムの目的は、最近の運動制御や学習の研究発展に大きな貢献を果している生態学的アプローチについての紹介と問題点にしばって話をすすめる。時間的余裕があれば、運動システムアプローチと行為システムアプローチの統合問題にも関心を拡大すべきであろう。

運動制御と学習の支配的パラダイムの盛衰を経験した者にとっては、AかBかの2分極化の観点は生産的ではない。しかし、「学説の衝突は災難ではない。それは好機である。A.N. ホワイトヘッド」という観点も忘れたくないものである。

参考文献：佐々木先生があげられている文献は是非読んでみて下さい。

- 1) J.J. ギブソン／古崎敬ほか訳「生態学的視覚論」サイエンス社 1985.
- 2) 佐々木正人・三嶋博之「エコロジカル・アプローチ—協調とアフォーダンス—」計測と制御, 33,282-288.1994.
- 3) 特集「アフォーダンス」現代思想, 22,11月号, 1994.
- 4) Meijer,O.G., & Roth,K.(Eds.) Complex movement behavior:The motor-action controversy. Amsterdam:North-Holland,1988.
- 5) Summers,j.j.(Ed.) Approaches to the study of motor control and learning. Elsevier:North-Holland,1992.

スポーツの中心にあること

佐々木正人（東京大学教育学部）

有機体の行為の特徴

チャールズ・ダーウィンは死の前年に出版した『ミミズと土』（平凡社）で特別な感覚器官や、脳に相当する神経組織をもたないミミズの行為を詳細に観察した。ミミズは「半水性」と呼ばれる湿った皮膚の状態を維持するために葉による「穴ふさぎ」を行う。通常は、近くに落ちている葉を利用する。その際には葉の「ふさぎ」の性質（細く穴にフィッ

トする)がよく選択される。このことは自然の葉だけではなく人工の葉(紙)でも確かめられた。葉がないときには小石や種をひろいあつめて穴の入り口をカゴのように覆う(日本にいるミミズは穴ふさぎをしないらしいが)。ミミズの選択は非常に柔軟で環境の多様性・変化に対応しているので、この行為が本能的にプログラムされたものでないことは明らかである。またダーウィンは慎重に観察して、この行為が試行錯誤の結果、つまり単純な刺激-反応の図式で説明できる行為ではないことも確認している。観察されたことは「ミミズが種々の対象のふさぎやすさのようなことを知覚していた」といわざるをえない事態であった。結局ダーウィンは「ミミズは同様な環境での人間とほぼ同じようなやり方で行動」する、つまりミミズにも「知能」があると述べた。生態心理学者のエドワード・リードはダーウィンがこの著作で残したメッセージが「単純にみえる現象がじつは単純ではない」ということにあるとしている。ダーウィンは死の直前まで19世紀に流行していた「機械論的」な人間観に違和感を表明していた。彼はミミズの観察によって、「中枢のプログラム」と「刺激-反応-評価」という流れによって因果的に制御されている「機械の行為」と、環境に存在する情報によって複雑に(つまり因果的には記述できない)調整されている「有機体の行為」とがまったく異なる出来事であることを主張したのである。

スマッシュという調整

熟練した行為を「定型」とみなし、それとの環境の接点を、単純な刺激-応答の図式で描く「タイミング操作仮説」に反証するためにブーツマら(Bootsma, et al. 1990 :JEP. HPP, 16. 21-29)が検討したのは卓球選手の「打ち込み」である。国際レベルの選手に与えられた課題は、相手コートから練習機が打ってくる4メートル/秒の速度のボールを、2.5メートル離れている相手コートの直径55cmの円内に正確にかつ最大の速度で40回打ち込むことであった。選手がどこでスマッシュを開始するかと、どこでラケットとボールが衝突したかを、相手側と味方側のコートを分ける縁との距離で計測すると、スマッシュ開始時の距離の標準偏差よりも、衝突時のそれがすべての選手で大きかった。どの選手でも縁からの距離の平均値はスマッシュ開始時の方が衝突時よりも倍ちかくあるにもかかわらずである。またボールが選手により接近した位置でスマッシュが開始された場合には、選手はより加速してスマッシュ動作を進行させることが示された。このことは、一旦開始された急速な動作が、その後も微妙に調整されていることを示している。その様子は一人の選手の7回の試行でのラケットの方向の変化をプロットした下図によく示されているだろう。ラケットの角度・加速度はそれがボールと衝突するの直前(約60ミリ秒くらい)まで持続して変化している。

この研究が明らかにしたことは、行為が知覚情報にたいして限りなく「柔軟」であるということである。熟練したスポーツマンの行為は特定の刺激によってトリガーされる「定

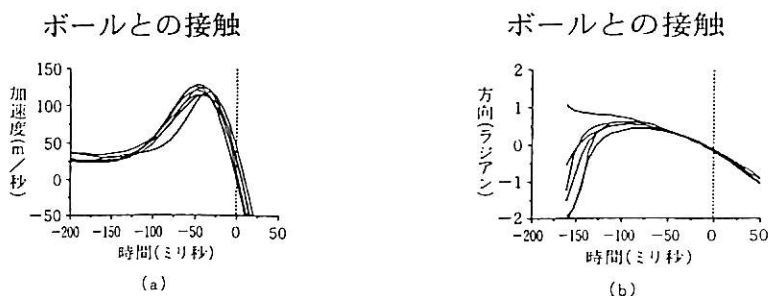


図1 卓球選手のスマッシュ動作の減速 (a) とラケット面の向きの変化 (b) (1ラジアンは約57度)

型」なのではなく、知覚情報、つまり環境の変化にたいして限りなく柔軟になるプロセスの習得であることを示している。ダーウィンがミミズの行為に発見した複雑さを特徴とする「知能」がここにも発見できる。

コーチは何を語るべきか

ミミズの知覚と行為の調整に、卓球選手のラケットの動きに観察できることをリードは「意識 (awareness)」と呼んだ。私たちはこのレベルの知性のすべてを必ずしも自己意識化 (self-consciousness) できない。awarenessは暗黙である。いうまでもなく暗黙であるということはそれについて私たちが無知であるということの意味しない。この暗黙の出来事を私たちの行為はたしかに「知っている」。このレベルで私たちの行為が探究していることは「知覚的知識 (これがアフォーダンスである)」とでも呼べる環境の出来事である。おそらくまともなスポーツのコーチや体育の教師が選手たちの行為に見ていることはこの「知覚的知識と行為との調整しあい」という出来事であろう。

スポーツ競技者の世界には「捌き」という用語がある。「捌き」は辞書では「技芸などをすっかり身につけて楽に扱う」と定義される。たとえば「幅跳び」の選手たちの間では「踏切板をける時の音」は「捌き」の一つである。「スパンと頭からぬける音」、「音のにぶくない人」は巧みなロング・ジャンパーであるという。これは幅跳びの助走が「加速しても空中での滞留時間が減少しない走り」であること。最終の飛び出しの局面でも、この「足を地面にたたきつけるような走り」が維持されていることが、踏切板の見えの変化に柔軟に同調するために重要であることを明らかにした実験研究の成果に一致している。「音」はロング・ジャンパーの技能を凝縮している可能性がある。スポーツの世界でいわれる「捌き」とは知覚的知識と行為との調整そのものであり、「捌き」についての表現とはこの調整の中心にあることを表現したことである。スポーツという暗黙の課程の中心にあることを理解するためには、まず、それ自体を調整として記述する必要がある。そしてもし指導過程にことばが必要であるとするならばこの中心にあることを表現する

「わざの表現」である必要がある。

参考文献

- 1) 佐々木 (1994) アフォーダンス—新しい認知の理論. 岩波科学ライブラリ12.
- 2) 佐々木・三嶋 (1994) 運動制御への生態学的アプローチ. 岩波講座認知科学4「運動」, pp. 2-28, 岩波書店.

視覚性運動制御について

山本裕二 (名古屋大学総合体育科学センター)

視覚性運動制御とは

人間の運動行動は、環境との相互作用のなかで生じる。環境からの情報を処理し、環境に働きかける。こうした行動を連続的に繰り返しつつ、自らの行動の変化の結果として、環境に対して目的となる変化を生じさせる。こうした環境とのインターフェイスとして重要な役割を果たしているのが視覚であり、視覚情報に基づく運動制御を視覚性運動制御と呼んでいるのであろう。したがってスポーツにおける運動行動は健常者の場合にはほとんど、この視覚性運動制御を行っていることになる。また、日常生活においても多くの運動はこうした視覚性運動制御のもとで遂行されていることになる。

従来の情報処理的アプローチにおいては、感覚器での刺激の入力→中枢による処理→筋・骨格系への出力という情報の流れを仮定し、特に表象に基づく運動プログラムの実行という考え方をとってきた。つまり、刺激の種類によって運動プログラムが事前に決まり、いくつかのフィードバックループによって修正されるものの、基本的にはその運動プログラムに基づいて出力されるとしている。

これに対して、生態学的アプローチでは、運動系の協応構造が仮定され、多くの独立した下位システム協応によって運動は起こるので、単一の運動プログラムによってすべてを制御しているのではないという立場をとる。情報処理的アプローチが筋や骨格系の運動のダイナミクスを考慮しなかった点に対する批判として提出された考え方といえる。さらに、オプティカルフローと呼ばれる、観察者の視覚にもたらす環境の変化に関する情報が、こうした運動のダイナミクスに重要な役割を果たしているとするものである。ここでは、運動の結果によってもたらされる環境の変化が次の運動と密接に関連していることを示し、断片的な刺激の時間的集合として環境をとらえるのではなく、連続的な情報の変化として環境をとらえる点に情報処理的アプローチとの差異があると考えられる。

Critical viewing time

情報処理的アプローチにおいて、視覚性運動制御に重要な役割を果たすと考えられてきたのに'critical viewing time'がある。これは、視覚刺激を中枢で処理するのに必要な時間を表し、特にスポーツにおける捕球動作や打球動作において「どの時間まで刺激が見えていることが必要か？」という観点から研究されてきたものである。

視覚性運動情報 τ

特に物体が行為者に接近している場合に、オプティカルフローから直接的に導き出される情報として示されたものが、視覚性運動情報の τ (タウ) と呼ばれるものである。物体の接近が眼の投影面に相似形で投影されることから、ある時点での物体との距離をその物体の速度で割ったもので接触までの残り時間 (time-to-contact) が特定できるというものである。このようにして得られた τ を用いて様々な運動の組織化がなされているとする。

問題提起

このように、スポーツ技能の中には、捕球や打球といった物体との接触が技能の中核になるものが数多くある。しかも、非常に高速な運動の中で巧みに制御されている事実がある。ここでは、実際のスポーツ技能の中的一致タイミング課題ともいえる打球動作について、野球やソフトボールでのインコースとアウトコースのバッティング動作について、情報処理的アプローチと生態学的アプローチから検討してみる。

生態学的アプローチは非常に魅力的な方法であるが、実際に検討してみると多くの疑問がわくのも確かである。例えば、

- ・動作開始時の τ (tau marginと呼んでいる) は動作が異なっても共通か？
- ・動作開始 (運動の組織化?) をどうとらえるか？
- ・動作開始時の τ とcritical viewing timeとの関係は？
- ・視覚-運動遅延とvisual feedbackの関係は？
- ・ τ は学習されるのか？
- ・学習されるとするとそれは表象にならないのか？
- ・Arbibの協応制御プログラムとの相違点は？

などなどである。

ただ経験的には、「ボール感がよい」、「球技のセンスがよい」人というのが存在するのも事実であり、こうした視覚性運動制御から得られる知見に期待するところは大きい。

2. 各種関連学会の大会開催予定

本年および明年開催される国内・国外の関連学会ならびに関連学会事務局一覧をお知らせいたします。すでに終了した学会も掲載しておりますが、平成8年度開催の参考にしてください。

国内関連学会開催一覧（1995年3月～1995年11月）

学会名	大会	期日	会場
日本発達心理学会	第6回大会	3/28(火)～3/30(木)	同志社大学
日本生理心理学会学術大会	第13回大会	5/18(木)～5/19(金)	佐賀県女性センター
日本基礎心理学会	第14回大会	5/26(金)～5/27(土)	東京都立大学
日本カウンセリング学会	第28回大会	5/28(日)～5/29(月)	筑波大学
日本バイオフィードバック学会総会	第23回大会	6/17(土)～6/18(日)	福井大学
日本応用心理学会	第62回大会	9/8(金)～9/9(土)	共立女子大学
日本社会心理学会	第36回大会	9/23(土)～9/24(日)	成城大学
日本教育心理学会	第37回大会	9/28(木)～9/30(土)	茨城大学水戸キャンパス
日本体育学会	第45回大会	10/3(火)～10/6(金)	群馬県民会館
日本心理臨床学会	第14回大会	10/8(日)～10/10(火)	九州大学教育学部
日本心理学会	第59回大会	10/11(水)～10/13(金)	沖縄コンベンションセンター
日本ストレス学会学術総会	第11回大会	10/27(金)～10/28(土)	砂防会館
日本臨床心理学会	第31回大会	10/27(金)～10/28(土)	宮城県心身障害福祉センター
日本健康心理学会	第8回大会	11/5(日)～11/6(月)	東京家政大学狭山校舎
日本健康科学学会	第11回大会	11/11(土)～11/12(日)	日本大学医学部会記念講堂
日本スポーツ心理学会	第22回大会	11/20(月)～11/21(火)	学習院大学念講堂
日本グループダイナミックス学会	第43回大会	11/25(土)～11/26(日)	学習院大学

国際関連学会開催一覧（1995年5月～1996年8月）

May 22-26, 1995, NORWAY

10th International Symposium on Adapted Physical Activity(10th ISAPA)

June 15-18, 1995, California, USA

North American Society for the Psychology of Sport and Physical Activity(NASP SPA)

June 22-24, 1995, Colorado Springs, Colorado, USA

United States Olympic Academy

Critical viewing time

情報処理的アプローチにおいて、視覚性運動制御に重要な役割を果たすと考えられてきたのに'critical viewing time'がある。これは、視覚刺激を中枢で処理するのに必要な時間を表し、特にスポーツにおける捕球動作や打球動作において「どの時間まで刺激が見えていることが必要か？」という観点から研究されてきたものである。

視覚性運動情報 τ

特に物体が行為者に接近している場合に、オプティカルフローから直接的に導き出される情報として示されたものが、視覚性運動情報の τ (タウ) と呼ばれるものである。物体の接近が眼の投影面に相似形で投影されることから、ある時点での物体との距離をその物体の速度で割ったもので接触までの残り時間 (time-to-contact) が特定できるというものである。このようにして得られた τ を用いて様々な運動の組織化がなされているとする。

問題提起

このように、スポーツ技能の中には、捕球や打球といった物体との接触が技能の中核になるものが数多くある。しかも、非常に高速な運動の中で巧みに制御されている事実がある。ここでは、実際のスポーツ技能の中の一致タイミング課題ともいえる打球動作について、野球やソフトボールでのインコースとアウトコースのバッティング動作について、情報処理的アプローチと生態学的アプローチから検討してみる。

生態学的アプローチは非常に魅力的な方法であるが、実際に検討してみると多くの疑問がわくのも確かである。例えば、

- ・動作開始時の τ (tau marginと呼んでいる) は動作が異なっても共通か？
- ・動作開始 (運動の組織化?) をどうとらえるか？
- ・動作開始時の τ とcritical viewing timeとの関係は？
- ・視覚-運動遅延とvisual feedbackの関係は？
- ・ τ は学習されるのか？
- ・学習されるとするとそれは表象にならないのか？
- ・Arbibの協応制御プログラムとの相違点は？

などなどである。

ただ経験的には、「ボール感がよい」、「球技のセンスがよい」人というのが存在するのも事実であり、こうした視覚性運動制御から得られる知見に期待するところは大きい。

2. 各種関連学会の大会開催予定

本年および明年開催される国内・国外の関連学会ならびに関連学会事務局一覧をお知らせいたします。すでに終了した学会も掲載しておりますが、平成8年度開催の参考にしてください。

国内関連学会開催一覧（1995年3月～1995年11月）

学会名	大会	期日	会場
日本発達心理学会	第6回大会	3/28(火)～3/30(木)	同志社大学
日本生理心理学会学術大会	第13回大会	5/18(木)～5/19(金)	佐賀県女性センター
日本基礎心理学会	第14回大会	5/26(金)～5/27(土)	東京都立大学
日本カウンセリング学会	第28回大会	5/28(日)～5/29(月)	筑波大学
日本バイオフィードバック学会総会	第23回大会	6/17(土)～6/18(日)	福井大学
日本応用心理学会	第62回大会	9/8(金)～9/9(土)	共立女子大学
日本社会心理学会	第36回大会	9/23(土)～9/24(日)	成城大学
日本教育心理学会	第37回大会	9/28(木)～9/30(土)	茨城大学水戸キャンパス
日本体育学会	第45回大会	10/3(火)～10/6(金)	群馬県民会館
日本心理臨床学会	第14回大会	10/8(日)～10/10(火)	九州大学教育学部
日本心理学会	第59回大会	10/11(水)～10/13(金)	沖縄コンベンションセンター
日本ストレス学会学術総会	第11回大会	10/27(金)～10/28(土)	砂防会館
日本臨床心理学会	第31回大会	10/27(金)～10/28(土)	宮城県心身障害福祉センター
日本健康心理学会	第8回大会	11/5(日)～11/6(月)	東京家政大学狭山校舎
日本健康科学学会	第11回大会	11/11(土)～11/12(日)	日本大学医学部舎記念講堂
日本スポーツ心理学会	第22回大会	11/20(月)～11/21(火)	学習院大学念講堂
日本グループダイナミックス学会	第43回大会	11/25(土)～11/26(日)	学習院大学

国際関連学会開催一覧（1995年5月～1996年8月）

May 22-26, 1995, NORWAY

10th International Symposium on Adapted Physical Activity(10th ISAPA)

June 15-18, 1995, California, USA

North American Society for the Psychology of Sport and Physical Activity(NASP SPA)

June 22-24, 1995, Colorado Springs, Colorado, USA

United States Olympic Academy

June 26–30, 1995, ISRAEL

The 1995 AIESEP World Congress

July 4–9, 1995, Brussels, BELGIUM

9th European Congress on Sport Psychology

July 9–13, 1995, Melbourne, AUSTRALIA

7th International Congress on Reversal Theory

July 9–14, 1995, Marseille, FRANCE

8th International Conference on Perception and Action

July 9–16, 1995, Gainesville, Florida, USA

1995 World Congress for Health, Physical Education, Recreation, Sport and Dance (ICHPERSD)

August 1–3, 1995, Goteborg, SWEDEN

International Congress on Sports Medicine and Social Science in Athletics

August 11–15, 1995, New York, USA

American Psychological Association (APA), Division 47 (Exercise and Sport Psychology)

August 24–26, 1995, Fukuoka, JAPAN

FISU/CESU Conference, Universiade '95 Fukuoka

September 16–22, 1995, Atlanta, Georgia, USA

Third IOC World Congress on Sport Science

September 27–October 1, 1995, New Orleans, Louisiana, USA

Association for the Advancement of Applied Sport Psychology (AAASIP)

October 17–21, 1995, China

Notice of the international Congress of Research on Physique and Physical Fitness

October 25–29, 1995, Milwaukee, WI, USA

American School Health Association Annual Conference

July 10–14, 1996, Dallas, Texas, USA

The 1996 International Pre-Olympic Scientific Congress

July 14–18, 1996, Memphis, Tennessee, USA

An International Conference on Overtraining in Sport

August 16–20, 1996, Montreal, Quebec, CANADA

26th International Congress of Psychology

3. 関連学会事務局一覧

学 会	事 務 局	〒	住 所	電 話
日本体育学会	岸記念体育館内 508号	150-50	渋谷区神南 1-1-1	03-3481-2427
日本スポーツ心理学会	日本大学文学部	156	世田谷区桜上水 3-25-40	03-3329-1151
日本心理学会	日本心理学会事務局	113	文京区本郷 2-10-14 山崎ビル 902号	03-3814-3953
日本教育心理学会	東京大学教育学部内	113	文京区本郷 7-3-1	03-3818-1534
日本臨床心理学会	精神保健研究所内	272	市川市国府台 1-7-3	0173-72-0141
日本心理臨床学会	日本学会事務センター内	113	文京区弥生 2-1-6	03-3817-5851
日本カウンセリング学会	筑波大学教育研究科田上研究室内	112	文京区大塚 3-29-1	03-3942-6833
日本応用心理学会	日本女子大学人間社会学部心理学研究室内	214	川崎市多摩区西生田 1-1-1	044-952-6890
日本社会心理学会	慶応義塾大学文学部青池研究室内	108	港区三田 2-15-45	03-3453-4511
日本グループ・ダイナミックス学会	集団力学研究所内	810	福岡市中央区天神 1-4-1 西日本新聞14F	092-713-1308
日本生理心理学会	愛知淑徳大学文学部 コミュニケーション学科内	480-11	愛知県長久手町大字長湫字片平 9	0561-62-4111
日本基礎心理学会	帝京大学文学部心理学科内	192-02	八王子市大塚 359	0426-74-6798
日本発達心理学会	百合女子大学児童文化学科内	182	調布市緑ヶ丘 1-25	03-3326-9417
日本健康心理学会	早稲田大学文学部織田研究室	162	新宿区戸山 1-24-1	03-3203-4141
日本ストレス学会	東京医科大学衛生学公衆衛生学教室内	160	新宿区新宿 6-1-1	03-3351-6141
日本健康科学学会	日本大学理工学部医療福祉工学専攻内	101	千代田区神田駿河台 1-8	03-3259-0877
日本バイオフィードバック学会	東邦大学医学部心身医学講座内	143	大田区大森西 6-11-1	03-3762-7547

注) その他、会員の皆様が所属している学会がございましたら、事務局までお知らせください。

IV. 地区別研究会活動

1. 関東地区

「臨床スポーツ心理研究会」の紹介

本研究会が発足したのは、富山大学で体育学会（1991）が行われた時でした。

「体育やスポーツ場面の臨床的問題を口頭で研究発表するには、12分という時間ではあまりにも短かすぎる。1 演題についてもっとじっくりフロアーと意見の交換をしてみたい」といった一部の欲求不満が底の方で引きずっていたように思います。また、他の研究領域でも同様なことが言えるわけですが、「本当に興味・関心を同じくする者たちだけの研修の場を増やしたい」といった願いが、臨床に係わる人には強かったように感じています。

太田先生（現・武蔵丘短期大学）が順天堂大学におられた10数年以上も前から、「臨床に関心を持っている者たちの集まりを持ちましょう。もっと“個”をみることの大切さを訴えましょう」と、お会いするたびに言われていたことを思い出します。

やっとなお重い腰を上げたのが、上述した富山の体育学会開催の時でした。とりあえず星野（順天堂大学）と中込（筑波大学）が発起人になり、分科会の会場で呼びかけたのが4年前、以後、学会開催中日を中心に研究会を継続してきました。毎回、2 演題（各1 時間半）の発表・討議を行っています。厳密な区別は難しいのですが、発表していただいている内容は、「スポーツ選手へのカウンセリング」「メンタルトレーニング」「スポーツセラピー」といった3つの側面のいずれかです。共通していることは、事例報告であるということです。

研究会で取り上げた話題を中心に、これまでの歩みを紹介いたします。

第1回（富山大学）

51名の方にお集まりいただき、研究会の発足をいたしました。発起人から主旨を説明した後、自己紹介、今後の会の運営等についてそれぞれの立場から自由に意見を出し合っていました。その中で、次のような方向が出されました。

- ・会の名称は「臨床スポーツ心理研究会」とする。
- ・事務局は筑波大学・中込が担当する。
- ・事例報告を行う。

その他、会員の中から、「現場での問題に対応するためには臨床が必要」「実質的な効力のある集まりにしたい」「“なぜ”よりも“どうするか”に関心を多くおきたい」「個をじっくり検討したい」「臨床を狭くとらえず、健康レベルの問題も扱って欲しい」「情報交換を積極的に行いたい」、などの意見が出されました。

第2回（大妻女子大学）

- 「過食症学生に対するトレーニング指導の試み」 道向 良・長尾 博
「某実業団ソフトテニス選手へのメンタルトレーニングを振り返って」
鈴木 壯・中込四郎

第3回（大阪・阿倍乃荘）

- 「スポーツ選手の姿勢改善による心理的変容」 飯島正博・星野公夫
（コメンテーター：中島登代子）
「大学運動選手を対象としたメンタルトレーニング講習会の試み」
中込四郎・土屋裕睦・高橋幸治・高野 聰
（コメンテーター：鈴木 壯）

第4回（山形県民会館）

- 「岐阜スポーツ科学トレーニングセンター—身近なスポーツ心理を目指して—」
渡植理保
（コメンテーター：岸 順治）
「クラブの継続に悩むソフトボール選手の事例」 鈴木 壯
（コメンテーター：中島登代子）

以上のような報告がこれまでなされてきました。開催大学の関係の方には、毎回、会場の準備をしていただき感謝いたしております。紙面の都合から、個々の事例紹介の概要ならびに討議については省略させていただきました。いずれも、予定されている時間が足りなくなるほどの充実した時をもてたと実感するのは、筆者だけではないと思います。

現在、登録されている会員数は89人であり、研究会には毎回50名前後の方の集まりをいただいております。会の規模が大きくなることは喜ばしいことである半面、何かと課題も増えるようです。現在まで、研究会は学会開催時の年1回行われているだけですが、さらに別の機会を希望する意見も出されています。今後、会員の皆さんと本研究会の歩むべき方向をしっかりと考えねばならない時がきているように思われます。

（文責：星野・中込）

2. 関西地区(1)

体育心理学例会（平成6年度）

第1回目（平成5年12月10日（金） 以和貴荘 参加者：20名）

「身体活動の心身機能に及ぼす影響について—体育実技とジョギング—」

滝 省治

第2回目（平成6年3月11日（金） 近大会館 参加者：8名）

「大学体育におけるボディ・ワークの展開」

津田 忠雄

第3回目（平成6年5月13日（金） 近大会館 参加者：17名）

「北米スポーツ心理学研究の動向」

高妻 容一

第4回目（平成6年7月1日（金） 近大会館 参加者：19名）

「女子学生の心理療法の事例—夢と箱庭に見られるイメージと体育実技の意味—」

中島登代子

第5回目（平成6年9月16日（金） 近大会館 参加者：13名）

「黙想の生理心理学検討—一流選手の脳波より—」

荒木 雅信

第6回目（平成6年12月9日（金） 近大会館 参加者：13名）

「スポーツビジョントレーニングの検討」

吉井 泉

事務局 本年4月から近大へ引き継ぎ予定です。

〒651-13 宝塚市紅葉ヶ丘10-1 甲子園大学経営情報学部 滝 省治

TEL：0797-87-5111 内404 FAX：0797-87-5666

3. 関西地区(2)

メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会

この研究会は、メンタルトレーニングをはじめとする応用的なスポーツ心理学のテクニックなどを現場で指導するコーチ、またそれを活用する選手に紹介したり、理解してもらうと同時に現場からの要求や声を研究者にも聞いてもらうような情報の交換の場をもうけることであった。現在、日本で盛んに行われている学会・研究会の多くが大学に席をおく研究者の参加を中心としたものである。そのために現場のコーチや選手の要望そして情報などが、研究者の研究内容や目的とかなりのギャップがあるように感じられる。そこでスポーツ心理学の研究やテクニックなどをどの様に紹介すれば、コーチや選手は喜ぶのか？また現場の声をどのように研究にいかしていくのか？などの情報交換を実践してみた。特に、この研究会は、国際メンタルトレーニング学会や北米応用スポーツ心理学会のワークショップなどを参考に、より具体的で応用できる情報やテクニックの討論の場として設定してみた。

研究会の内容

平成6年の7月に第1回研究会を開催し、研究者・コーチ・選手などのスポーツ関係者に参加を呼びかけた。最初に参加者の期待、参加の目的、希望などに関するアンケートに答えてもらい、いろいろな情報を収集した。たとえば、コーチの立場なら何を期待しているのか？選手なら・研究者なら参加することで何を得てどう活用したいのか？な

どであった。次に、メンタルトレーニングとはどのようなものか?の紹介、また実践している選手やコーチはどう感じているのかなどを話してもらい、参加者からの質問や討論へと進んでいった。

その後、毎月この研究会を開催し、研究会の運営方法などについても試行錯誤を繰り返した。毎回のアンケートにより、参加者の希望などを優先してひとつのパターンができあがっていった。

- ①挨拶
- ②前回の報告・今回の予定
- ③参加者の自己紹介
- ④メンタルトレーニングセミナー（講習会）
 - ・リラクゼーションの実践
 - ・世界で使われているテクニックの紹介
 - ・高妻氏のプログラム紹介
 - ・毎回、トピックスを決めてプログラムやテクニックの紹介・体験など
- ⑤セミナーの内容に対する質問などの討論
- ⑥特別ゲストの話・ビデオ・参加者の要望したトピックスについて
- ⑦それについての討論
- ⑧次回の予定・アンケートの書き込みなど
- ⑨研究会後の情報交換を目的とした懇親会

研究者への呼びかけ

昨年、スポーツ心理学会では、事務局の許可を得て、スポーツ心理学者用のメンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会を提案した。2日目の昼休みに興味のある研究者たちが集まり、今後どのように実施していくかなどについて話をした。スポーツ心理学会等で研究者やスポーツ心理学者といわれる人達が、コーチや選手にメンタルトレーニングをはじめとするスポーツ心理学のテクニックなどをどう具体的に指導するのか?というデモンストレーション・ワークショップか研究会などを討論した。学会のスケジュールの都合もあるので、ワークショップの中で実施してはどうかというアドバイスを事務局からいただいた。また関西地区体育心理専門分科会の例会などでの呼びかけなども実施した。

参加者

平成7年5月までの12回で参加者の延べ人数は、三百人以上となった。全出席の参加者はあまり多くなかったが、毎回新しい人が参加していた。参加者の多くは、選手、大学や高校のクラブや監督・コーチ、実業団のスポーツチームのコーチ、高校体育教師、

大学に席をおく研究者、博士・修士課程の大学院生、一般学生、クラブのマネージャー、企業の関係者、栄養や選手の治療などに関わっている人々であった。最初の目的は、監督・コーチの参加を中心にコーチが選手にどうメンタルトレーニングなどを指導するのか？というものであったが、いろいろな理由でコーチの連続した参加が少なかった。しかし、回を重ねる毎に選手の参加が増え、セミナーを強く希望するようになった。中には監督・コーチ・選手が共に参加し、チームに特別に指導して欲しいと申し出た大学のクラブもあった。参加者からのセミナーに対する要望が多かったため、10回（毎月1回）でひとつのメンタルトレーニング・プログラムのセミナーを続けていった。中には関西地区のみならず、泊まり掛けで来た名古屋、山梨、福岡、長崎からの参加者もあった。ある名古屋からの参加者のひとは10回全出席であり、もうひとは7～8回の出席であった。

問題点と今後への期待

毎月1回、金曜日の6：00～8：30という時間帯で、東大阪市の近畿大学で開催した。参加者の希望は毎月が適当という意見が多かったために毎月開催したが、連続して10回参加できた人は少なかった。曜日として金曜日を設定したため土・日の試合などのために参加できなかった人も多かった。可能ならばコーチを中心として研究会を発展させたかったのだが、選手の参加が多くなりセミナーを中心にして欲しいという要望が多くなっていった。選手はコーチや研究者などとの討論ができて良かったという意見が多いのに対して、コーチは言いにくい事もあるなど違和感を感じた人もいたようである。このようにコーチや選手が互いの意見を出して討論した経験が少ないためかとまどいもあったようである。この研究会の特徴としてコーチ・選手・研究者などの同時参加と討論を期待していた。しかし、若い高校のコーチや大学生選手がほとんどで、年輩のコーチや研究者は少なかった。

またコーチや選手にセミナーで実施したテクニックを自分の指導するチームや選手が自分自身で応用・活用してそのデータ、効果、感想などを持ち寄り、そのことについての討論に時間を費やしたかったのだがうまくいかなかった。この研究会の存在があまり多くの人に伝わらず、口コミが多くなってしまったことなどいろいろな反省点と考え直さなくてはいけない点が出てきた。特に残念だったのはスポーツ心理学を専門とする研究者があまり興味を示してくれなかったことである。

今後は、これらの反省点をもとに、より興味のもてる研究会にしていく必要があると感じたし、地道に続けていくことで新しい展開を見つけられるかもしれないと感じている。最近では、高い代金を取って講習会を開いている企業が増えてきた。米国でも同じ問題が何年も前に起こり、スポーツ心理学者やスポーツ心理コンサルタントのライセンス

制度ができたいきさつがある。またメンタルトレーナーの養成や講習会などの発展的な方向にわれわれスポーツ心理学を研究している者が動く必要性が出てきていると考えられる。今後は日本でも米国と同じようにメンタルトレーニングやスポーツ心理学がビジネスに組み込まれ広まることはまちがいないであろう。5月にカナダで開催された国際メンタルトレーニング学会でも、ビジネスとしてメンタルトレーニングを指導している人の方が研究者より多かった事実がある。

最後に、この研究会参加者の要望もあり、今後も毎月1回のペースで開催し、4月より曜日を水曜日に変更して実施している。またメンタルトレーニングのセミナー・講習会の方も途中から参加した人が多くなってきたため最初からもう一度始めることにし、より現場での効果があがるように教科書（プログラム）、セミナー用の書き込み用紙、コーチの指導日誌・選手の練習日誌のサンプルや書き込み用紙、そしてデータベース作成用の書き込み用紙やフロッピーまで用意した。今年度はいろいろな特別ゲストを招待してもっと中身のある研究会にしたいと考えている。

（文責：高妻容一）

4. 九州地区

第8回九州スポーツ心理学会

第8回大会から九州大学の事務局を引き継ぎ福岡大学が当番大学となりました。みなさんよろしくお願ひいたします。

第8回九州スポーツ心理学会は「健康・競技へのスポーツ心理学の貢献」というテーマで平成7年3月20日～21日の2日間、福岡大学セミナーハウスにおいて参加人数40名で開催されました。

第8回大会の新しい企画としては、健康スポーツ心理学部門を設けたことや、メンタル・トレーニングのデモンストレーションなどを行った点です。これらの企画は、現場の指導者にも役立つ内容があり、盛会に終わることができました。次回の開催は、平成8年3月16(土)、17(日)を予定しています。会長の佐久本稔先生(福女大)、副会長の徳永幹雄先生(九大)、理事長の山本勝昭(福大)、他のスタッフの熱心な準備のもと第9回大会も新しい企画と継続を行っていこうと考えています。九州地区外からの参加も歓迎しています。

尚、下記に第8回九州スポーツ心理学会の大会プログラムを記載いたしますのでご一読ください。

（福岡大学 山口 幸生）

第8回大会プログラム

特別講義

「生活様式としての健康スポーツ」—行動医学からの提案—

司会：山中 寛（鹿児島大学）

講師：足達淑子（城南保健所）

シンポジウム

「健康のための運動継続をめぐって」

司会：山口 幸生（福岡大学）

講師：水原 博而（全日空サンテロワ）

佐藤 昌久（健康科学研究所）

三好恵美子（早良保健所）

講演

「競技者への心理的サポートシステムについて」

司会：山本勝昭（福岡大学）

講師：岩崎健一（熊本大学）

研究発表

座長：秦泉寺尚（宮崎大学）

1. 体育大学新生における競技レベルとT S M I との関係

安永明智（鹿屋体育大学）

2. バドミントン選手の技能水準からみた注意様式について

高橋さと（福岡大学）

3. バレーボールのフォーメーションにおける認知的トレーニングの効果

兄井 彰（福岡大学）

座長：小橋川久光（琉球大学）

4. 寒暑耐性と性格との関係：運動トレーニングの影響

山内 正毅（長崎大学）

5. 運動中の心理的ストレスに対する生理的反応

渡辺 修（福岡大学）

座長：山内正毅（長崎大学）

6. 公的自意識が社会的促進に及ぼす影響

野田 昇（福岡大学）

7. 指導者の性差が大学生のセルフコンフィデンスに及ぼす効果

山本理奈（福岡大学）

8. バーンアウトとスポーツ離脱行動の関連についての研究 大嶺哲司（琉球大学）

特別企画 1

「競技力向上と私の指導法」

司会：山本勝昭（福岡大学）

講師：藤川 毅（柏陵高校）

外園 茂（中村学園好敵）

特別企画 2

「メンタル・トレーニング・デモンストレーション」

司会：大浦隆陽（福岡女子短期大学）

講師：高妻容一（近畿大学）

V. 研究室めぐり（その2）

中京大学スポーツ心理学研究室

武田 徹 猪俣公宏 小山 哲（中京大学）

体育学部および体育学研究科の沿革

中京大学は現在9学部から構成され、そのキャンパスは名古屋市東部と豊田市に分かれている。体育、社会、情報科学の3学部については緑の自然が豊かな豊田学舎にある。

体育学部は商学部について2番目に昭和34年（1959）に設置されている。学部は体育学科（体育科学、競技スポーツ、余暇スポーツの3コース）、健康教育学科、武道学科の3学科から成り、毎年春に約500名の学生が入学してくる。大学院については昭和49年に修士課程が、また62年には私立大学の体育学研究科として初めて博士課程が認可された。平成7年3月にはその研究科から3人目の課程博士を出すことができた。

開学40周年を経た今、その間には数多くの体育学部の卒業生が全国各県に公立、私立の中学や高校の教員として、また各競技団体の核となって活躍している。しかし近年は生徒数の著しい減少傾向の影響を受けて、職員採用枠も限られ、志願者にとって非常に狭き門になっている。そのため卒業生はむしろ活動の場を一般企業の中に見出し着実に地位を拡大してきている。なお、昨年秋には愛知県主催の「わかしゃち国体」開会式に学部として参加し、男女1,300名余による梯子とボールを使うきびきびしたマスゲームを披露した。

体育研究科で修士、博士の課程を修了した者は、昨年度までに延べ170名余に達し、その多くが全国各地にある大学、短大、高校の教員として、また、地方自治体が運営するスポーツ関連の施設の指導者となったりしている。本学の実験実習助手として勤め、配属された各系列の講座の中で、教室運営の役、後進の指導、自分の研究と忙しい人もいる。今年在籍の大学院生は40名近くに達し、院生研究室は満杯の状況になりつつある。また、体育学研究科には隣国から勉強に来る留学生の数が他の研究科よりも多い。留学生は帰国後それぞれに母国の体育系大学や専門学校の研究部門や管理職にあって中堅的な存在となって活躍している。

体育心理・スポーツ心理研究室については、大学院博士課程設置に先立ち、体育心理学研究室に松田岩男先生が上越教育大学から赴任された。数年後に本学の学長となられたが、特に多忙な時間の中で演習指導等を受けた学生も少なくない。非常勤講師としては大学院に市村操一先生（筑波大）、佐久間春夫先生（奈良女子大）、学部授業で西田

保先生、山本裕二先生（名古屋大）に指導して戴いたりした。

体育研究科で心理系を専攻した学生は今まで、修士課程に9名、博士課程から6名を出しているが、特に平成6年度末には初めて中国からの留学生、叶平氏が「競技動機に関する研究－異文化心理学の視点から－」のタイトルで学位論文を提出し、博士（体育学）を取得して帰国している。

教育・研究指導体制の概要

学部の専門課程カリキュラムの中で、私ども専任3名の心理のスタッフが担当している講座には次のようなものがある。なお殆どの教科目は選択必修または選択による2単位制となっている。

体育心理学、スポーツ心理学、スポーツ科学演習（実験・調査等）、スポーツ心理学特論、コーチング特論、トレーニング特論、保健体育科学演習、その他、2年次、3年次のゼミナール、4年次に卒論研究の時間がある。

大学院体育学研究科については、博士課程前期（修士課程）は平成7年度より4系列から5系列の講座に編成替えがあった。これまでスポーツ心理学は体育学講座に含まれていたが、新しく「スポーツ認知行動系」として旗を挙げ、いわゆるスポーツ心理学の研究部門として独自の路線を進めることとなった。また、これに伴って各講義・演習の名称についても、たとえばスポーツ心理学特殊講義という総合的なタイトルから、スポーツ認知行動論研究、同演習、というように方向や内容がある程度分かる名称に変えられた。前期課程では臨床スポーツ心理学研究、スポーツ心理学実験演習、幼児体育論研究、スポーツ加齢学研究、などが開講されることになった。博士後期課程では体育心理学演習が主軸であるが、他に体育心理学特殊研究、スポーツ心理学特殊研究等の講座が設けられている。これらは主として各研究者が取り組んでいるテーマに関連している研究文献を中心に、専門的な討議を進めていく講座といえよう。

JOC・日本体育協会の研究プロジェクトへの参画

既に松田岩男先生は日本体育協会のスポーツ医・科学研究委員会の心理部門のチーフをしておられ、T S M I の標準化には間接的に私どもはお手伝いしたことがある。先生の本学赴任を契機に研究室の重要な活動としてそれ以来色々な研究プロジェクトに参画してきている。現在は体協のスポーツ科学研究所をキーステーションとして猪俣を班長にいくつもの大学による研究組織の協力で毎年研究報告を行ってきた。基調となる共通テーマは3・4年毎に新しいシリーズと替わるが、今までは次のような標題である。なお中京大による研究のタイトルの一部を〔 〕内に併記した。これには教室スタッフの他、本研究科を巣立ち別の大学等の職場にいる同窓生の協力も大きい。

昭和60～63年度：スポーツ選手のメンタルマネジメントの研究、第1報～第4報

〔昭和62年：走持久力の向上に及ぼす心理的リラクセーショントレーニングの効果〕

〔昭和63年：身体運動後の回復期におけるリラクセーショントレーニングの効果に関する実験的研究－血中乳酸動態を指標として－〕

平成元年～4年度：チームスポーツのメンタルマネジメントに関する研究 I～IV

〔平成2年、3年：チーム心理診断テスト（SPTT）の開発、同テストの標準化〕

〔平成3年、4年：ハンドボールにおける認知的トレーニングの効果（1）、（2）〕

〔平成3年：競技種目別メンタルマネジメントに関する研究－ハンドボール－〕

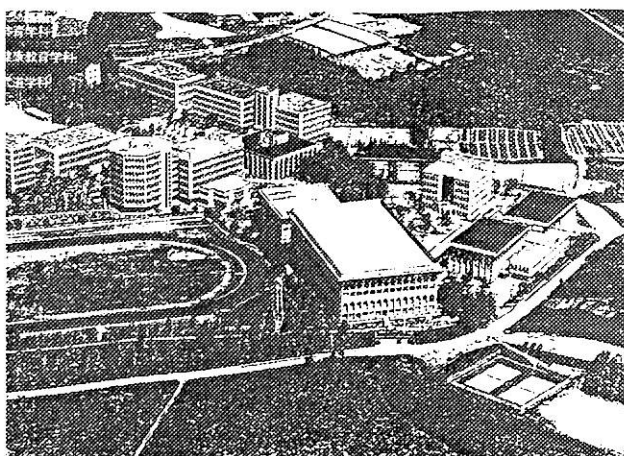
平成5～7年度・ジュニア期のメンタルマネジメントに関する研究

〔平成5年：ハンドボールジュニア選手のための教育プログラムの開発〕

〔平成6年：陸上競技・ハンドボールジュニアチーム指導者への面接調査〕

研究活動について

研究室としての現在の研究活動は、文部省科学研究補助金（継続一般B）1件、日本体育協会メンタルマネジメント研究プロジェクト2件、中京大学体育研究所メンタルトレーニング研究1件、その他委託研究1件などを中心に行われている。特に大学院生は積極的にこれらの研究プロジェクトに参加するように指導されている。これらの研究の中心的テーマは効果的なメンタルトレーニングの方法をめざしている。研究方法論においても従来の心理的手法にとらわれず、生理、バイオメカニクスなどスポーツ諸科学の手法を積極的に取り入れながら、新しい研究の手法について模索している。また体育学部の環境条件を生かしてスポーツ心理学の研究領域で得られた知見を競技現場に応用するため、学内のスポーツクラブを対象としたスポーツメンタルマネジメントのサービスプログラムを計画し、今年度から実施することになっている。



中京大学キャンパス

VI. 海外だより（その2）

アリゾナ州立大学での研究生活

磯貝浩久（九州工業大学）

平成6年8月より平成7年8月までの1年間、アメリカ合衆国のアリゾナ州立大学（Arizona State University）で研究生活を送る機会を得て、現在8か月目を迎えようとしている。

アリゾナ州立大学は、アリゾナ州の州都フェニックス市に隣接するテンピ市に位置している。この付近一帯は、冬季の温暖な気候のため全米各地から避寒に訪れる人達が大勢いる。プロ野球メジャーリーグのキャンプ地としても有名で、半数の球団がキャンプを張っている。日本からも今年は、中日ドラゴンズと千葉ロッテマリーンズが訪れキャンプを行っていた。

同大学は、1885年に創立された4万5千人の学生が学ぶ全米で5番目のマンモス大学であり、13学部85学科と幅広い分野で教育を行っており工学部と経営学部はとりわけ全米一の規模を誇っている。スポーツも盛んであり、アメリカンフットボール部が全米一位の戦歴を有し、バスケットボール、野球等からもプロ選手を多く輩出している。スポーツ施設も充実しており、今年のスーパーボールの会場となるアメフトのスタジアムをはじめ5万人収容の体育館、野球場、陸上競技場などどれもすばらしい限りである。また、ボーリング場、ビリヤード場、ゲームセンターがキャンパスにあることには驚かされた。



私は同大学で、Exercise Science and Physical Education学部のSport Psychology and Motor Control学科に所属し、スポーツ心理学を担当される、Landers教授から指導を

受けている。モーターコントロールの部門はThomas教授、Stelmach教授等が担当され、合計5名の教授陣で学科が構成されている。心理系の学科の他に運動生理、バイオメカニクス、健康学、哲学の4学科がある。

私が所属しているスポーツ心理学の研究室は、4名の博士課程の学生と6名の修士課程の学生それと2名の在外研究員が机を並べている。指導されるLanders教授は、ドライブセオリーに関する研究、覚醒とパフォーマンスに関する研究、生理心理的研究、メタ分析を用いた研究、運動の心理的効果に関する研究等の領域で多くの仕事をされている。

今回の私の研究テーマである、運動・スポーツの心理的機能への影響について、Landers教授から多くの示唆を頂いている。特に、運動の心理的効果のメカニズムを考える場合の問題として、脳波やホルモンあるいはHR等の生理学的な指標を用いることの有効性や、2つ以上の仮説を用いて実験を行うことの意義、厳密な実験計画を立てることの必要性等については適切な指摘を受けた。スポーツ心理の研究室でも、運動の認知機能に及ぼす影響や運動の気分への影響の研究が行われており、多くの情報を得ることができた。

また、いくつかの研究結果をより一般化する方法としてのメタ分析 (Meta-Analysis) についても学んでいる。メタ分析は、同一の現象に関して独立に行われた複数の実験や調査の結果を総合して、そのような現象の存在の有無を判断したり、その強度を推定したりするために用いられる統計手法の総称である。例えば、運動の不安低減への影響についてのメタ分析から、運動が不安低減に全体としてどの程度影響するのか、運動の時間や強度あるいは運動の種類の違いが不安とどう関連するのか、年齢や性等の被験者の相違が不安低減とどう関係するのか等について明らかにすることができる。このメタ分析の考え方や方法は私にとって非常に衝撃的なものであり、魅力に満ちたものである。

私が興味を抱いている研究テーマ、自己効力感と運動・スポーツ行動との関連については、米国ではかなりの関心が持たれているらしく数多くの研究がされており、それらの文献を収集しているところである。スポーツ場面での自己効力感に関する今後の問題は、おそらく自己効力感の一般性、チーム効力感、自己効力感と動機づけとの関連などであろう。

Landers教授は、Journal of Sport & Exercise Psychologyの編集を創刊号から7年間行われた経験があり、幅広い視点からスポーツ心理学での研究全般に関するアドバイスも頂くことができた。

特に、印象深かったのは、一般心理学で提唱された理論やモデルを、スポーツ場面で適用するには限界があり、スポーツ状況独自の理論なりモデルを構築しなければならない。そのために初めは一般心理学の理論を当てはめ、それを修正していきながらスポーツ場面での行動をよりよく説明できるモデルを見つけだすという考え方である。一般心理学の理論に執着してスポーツでの現象を説明しようとしてきた私の考え方に反省を促せるもので

あった。

また、スポーツ場面でのリアルな世界を説明するには、問題志向のアプローチが不可欠であり、いくつかの理論や仮説を同時に取り上げたり、生理心理や社会心理と言った広範囲な視点から課題に取り組むことが必要なことが理解できた。

これらの他、学部生を対象とした応用スポーツ心理学の授業と大学院生を対象とした運動心理学の授業を受講している。運動心理学の授業は、事前いくつかの論文を読んでいきディスカッションするという形式が取られている。また、各自のテーマに沿って模擬的に研究費申請書を作成し発表するというユニークな内容も盛り込まれていた。

しかし、語学不足からコミュニケーションがうまくとれずに、今になって英語の重要性を痛感している次第である。

アリゾナ州立大学での研究生生活も残り4カ月あまりとなった。6月にはカリフォルニア州で開催される北米スポーツ心理学会で発表を行う予定であり、その際には多くの研究者と交流を深めて来たいと考えている。また、何事にもアクティブな姿勢で臨み、より多くのものを吸収していきたいと思う。

スウェーデンからの手紙

Nationell Kongress-Mental Träning inom Elitidrotten参加レポート

佐藤雅幸（専修大学）

1993年3月27日アーランダ空港に到着。スウェーデン王国はマイナスの世界。ストックホルム市内を流れる川は真っ白に凍りついていて、周りを見渡せば金髪とブルーアイ。黒髪、黒い目の東洋人は目立ちまさに浮いた感じとはこのこと。

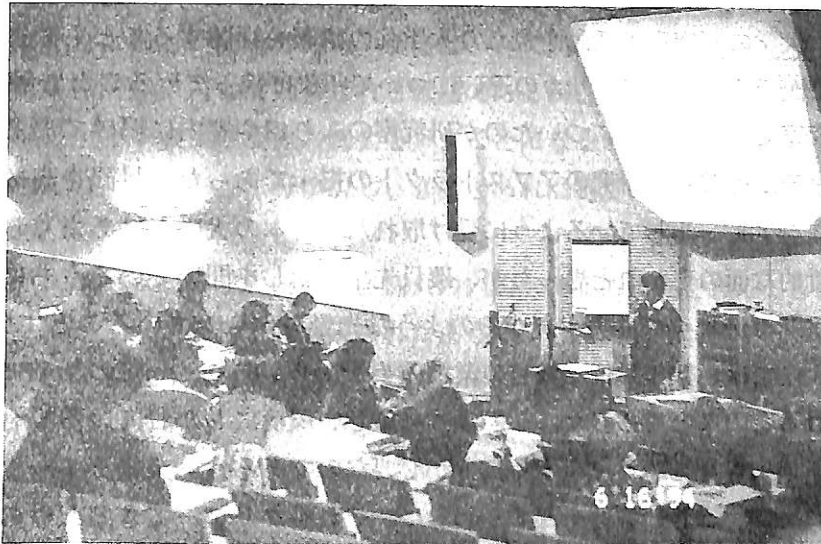
さてスウェーデンといえば何を連想するでしょうか？スウェーデンは日本の約1.2倍（45万km²）の国土を持ち、東京の人口にも満たない約860万人の人々が住んでいる。ここは岩盤の国。岩を破壊するためにアルフレッド・ノーベルがダイナマイトを発明した。スポーツの分野では全ての国民が健康で生活できることを願ってリングがスウェーデン体操を考え出し、健康づくりの先駆けとなったことは周知のとおりである。「スポーツ王国スウェーデン」そんな印象が強い。

一般的にテニスの本場はアメリカだと思われがちである。しかし歴史を振り返ると、近代テニスを一世風靡したビヨン・ボルグやマッツ・ピランデル、そしてややランキングは下降きみであるがステファン・エドバーグなどスウェーデン出身選手の活躍がめだつ。最

新の世界ランキング（1995. 4. 17現在）をみると世界トップ30位のなかになんと4名のスウェーデン人選手が入っている。ランキング外の選手でも、昨年ウインブルドン大会でクリスチャン・ベリーストローム選手がシングルスで準々決勝に進出し、ボリス・ベッカーと大接戦を演じているように潜在能力のある選手がごろごろいるのである。ちなみに日本人選手の最高は松岡修造選手の130位であることから層の厚さの違いが理解できるであろう。他のスポーツでもスキーの神様と称されるステンマルク、スピードスケートのグスタフソン、卓球のワルドナーなど世界的な選手がぞくぞくと生み出されている。それは個人スポーツだけにとどまらない。リレハンメルオリンピックではアイスホッケーで金メダルを獲得した。また、ワールドカップサッカーでは3位に入賞するなど団体スポーツでもその実力を存分に発揮している。スウェーデンスポーツの強い秘密はなんなのであろうか？興味あるところである。

さて私は、昨年（1993. 4-1994. 4）専修大学より在外研究の機会を与えられ、ストックホルム体育大学・カロリンスカ研究所に留学した。一年間という期限付きの留学であったため、なんでも見てやろうなんでも挑戦してやろうという気持ちで臨んだ。2か月が過ぎた頃、スウェーデン国内のスポーツ心理学者、スポーツの研究者、そしてコーチを対象としたメンタルトレーニングの学会（6月16日より18日まで）がOrebroの体育大学で開催されることを知り参加することにした。「長野・アトランタに向けて」と題されたこの学会にはディレクターのOlle Anfelt氏を中心にインナー・メンタルトレーニングプログラムを作成したLars-Eric Unestahl氏などスポーツ心理学者のみならずリレハンメル・オリンピックスピードスケート金メダリストのTomas Gustavsson氏、フリースタイル女子銀メダリストのMari Lindgren氏など現役の選手、コーチが参加する活気あふれる学会であった。アトランタ、長野オリンピックにむけてスポーツ心理学者が現場の選手とどのようにして活動していくか、そしてスポーツ心理学者間のネットワークづくりなどについて話し合われた。2泊3日、昼食や夕食をともにしながら朝から晩まで全体ミーティングとグループミーティングが続いた。ゲストスピーカーも最後まで討議に加わって、有意義なディスカッションが展開された。なかでも興味深かったのは、アメリカズカップ（ヨット競技）に出場したスウェーデンチームのスポーツカウンセラーEdsgren Ronnie氏の話であった。彼がまず最初に行ったことは物の見方、考え方のトレーニングだったというのである。今回のスウェーデンチームはスウェーデン人だけで構成されているのではなく、ノルウェー、フィンランド、ドイツなど多くの人種が混ざったチームであった。最初の頃、生活習慣を含む、物の考え方が全く違うためにチーム内で問題が多発したというのである。したがって、彼が従来のメンタル・トレーニング（多くのプログラムはリラクセーションから導入されている）に先立って行ったことは、選手の凝り固まった価値観に幅を持たせるための

トレーニングであったというのである。そこが決まらないとメンタルトレーニングが積み上がらない。これこそがメンタル・トレーニングの第一段階ではないだろうかとも述べていた。彼は、実際にチームの一員として船に乗り込み試合に参加している。練習から試合まで選手と苦楽をともにした経験からの発言だけに説得力ある内容であった。マニュアル化したメンタルトレーニングへの警鐘とも思えた。最後に彼が私にあなたはメンタル・トレーニングとはなんだと思いますか？と問いかけてきた。そこで私、んーん・・・と沈黙。この沈黙は語学力不足のせいだけではなかった。



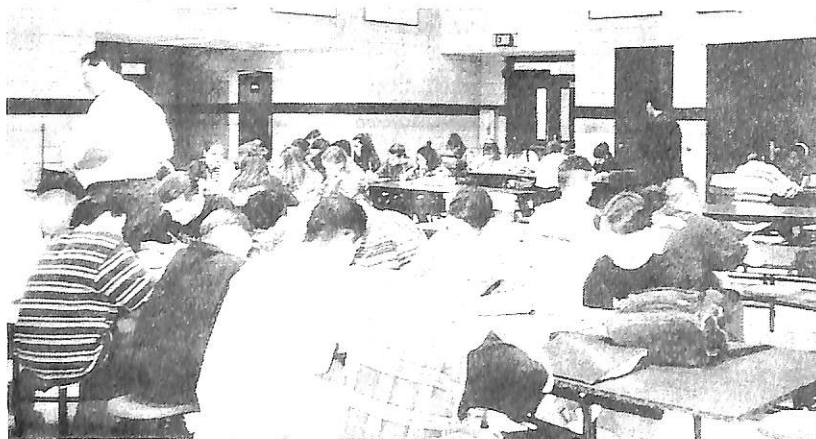
Ⅶ. 国際学会・国際学術調査だより

海外調査の機会を得て

竹之内隆志・西田 保（名古屋大学総合健康体育科学センター）

本年3月、名古屋大学学術振興基金の援助により、スポーツ離脱の発生要因に関する日米比較研究のために海外調査を行なう機会を得た。渡航先はアメリカのアリゾナ州で、現地調査はアリゾナ州立大学のランダース博士と同氏のもとへ留学されていた九州工業大学の磯貝浩久先生の支援を受け遂行することができた。期間が3週間ほどあったため、調査のみならず、大学の研究室の活動を見たり大学院の講義を拝聴することもできた。ここでは、制度的側面での日本とアメリカの違いについて印象に残っていることに触れてみたい。

大学の研究室を見学して目についたのが研究室の入り口や室内に掲げてあるスタッフの写真とスタッフが行なった研究のアブストラクトの掲示であった。景観を高めるとともに自分達の存在をアピールしているように受け取れた。日本の大学ではあまりみられずアメリカ人の気質的な面の現われと思ったが、磯貝先生の話しを聞いているうちに、単なる気質ではなくアメリカ社会の能力主義がそのような光景を作らせていることに気がついた。アメリカの大学では、数年単位で教官の業績のチェックがあり、一定の基準に満たない時には解雇されるとのことであった。このような厳しい環境におかれている場合、自己防衛のためにも自己の存在をアピールすることが必要なのであろう。業績チェックという厳しい側面に触れたが、厳しい条件を課すかわりに、それをクリアーできるだけの環境の整備がなされていることも印象的だった。ランダース博士は大学院の授業を教えるのみで、学部生の授業は大学院生が担当していた。公的に認められたものかわからないが、教官は研究のための十分な時間を確保することができる。評価は厳しいがそれをこなすための研究条件は配慮されていた。



さて、調査にあたっては、困ったことがひとつあった。日本のドロップアウトの文献をみると、対人関係の軋轢、特に上級生と下級生の関係悪化を理由としたドロップアウトが特徴的なものと報告されている。そこで、調査では上下関係に関わる項目を含めて、この点を数量的に比較しようと試みた。しかし、アリゾナ州の中学では上級生と下級生が一緒に練習するのではなく、各学年ごとにチームを作り練習しているため、これらの質問に答えられないと言うのである。運動部全部がそうではなかったが、当地ではそのような形態が主流であり、大会も学年ごとに開かれているようであった。このような制度をみて、なるほどアメリカでは上下関係の問題がドロップアウトの理由として挙がってこないのだと了解した。そして、上下関係の問題によってドロップアウトしていく者が多いという日本の現状を考えた場合、アメリカ的な制度を導入することもひとつの案だと思った。制度を改めることは非常に難しい問題である。例えば、対人関係面でのスキルの発達は、学校運動部といった集団活動に対して期待される課題であるが、各学年ごとでの練習形態を導入した場合、上級生と下級生の交流の機会を奪うことになるといった点などの是非を問わねばならない。このような点を十分検討し、必要とあれば制度の変更を提唱できるような研究成果の蓄積が待たれる。

これまでのスポーツ心理学の研究は、個人の内的な側面に焦点をあててきたが、高校野球にメデイカルチェックの制度が導入されたように、心理面からも制度といった環境面への提言が可能となるような研究が期待されているのではないかといった感を強めた海外渡航であった。



VIII. 事務局関連資料

1. 事業報告

1) 第46回日本体育学会専門分科会連絡会議

平成6年10月6日、山形大学で、平成7年度の大会について当番大学（群馬大学）の担当と日程などについて話し合った。徳永・橋本出席

2) 論文審査員の推薦

1月30日付で学会誌「体育学研究」の論文審査員（1995～96）の推薦依頼があったので、候補者2名を推薦した。

3) 体育心理学専門分科会の運営委員の依頼と分科会活動についての意見調査

平成6年度の体育心理学専門分科会の総会で承認された運営委員（本専門分科会が選出した日本体育学会評議員19名）に、委員の依頼と平成7年度のキーノートレクチャー、シンポジウム、大会前日のセミナー、懇親会、会報発行についての意見を、平成6年11月30日（水）までに回答していただくように連絡した。その結果は別紙のとおりであった。

4) 専門分科会企画の検討

伊藤政展（上越教育大）より第46回大会のキーノートレクチャーおよびシンポジウムの提案をして頂き、事務局で検討し、講師・司会等の交渉を開始した。

5) 第46回日本体育学会での座長の推薦および分科会企画

第46回日本体育学会における専門分科会企画および座長候補者名簿について群馬大学より提出依頼があった。キーノートレクチャーは村越真（静岡大学）、シンポジウムは、司会：調枝孝治（広島大学）、演者：佐々木正人（東京大学）、山本裕二（名古屋大学）の各氏と座長候補者18名を平成7年3月31日付けで送付した。

6) 体育心理学専門分科会企画の発表要旨の提出

群馬大学よりキーノートレクチャー、シンポジウムの発表要旨の提出依頼があった。4名の関係者に連絡し、回収した。6月12日付けで群馬大学および各演者に要旨を郵送した。

7) 日本体育学会理事会および支部長・専門分科会世話人合同会議

平成7年5月27日東京都岸記念体育館で上記の会議が行われた。理事会に杉原、猪俣、徳永。合同会議に徳永が出席した。

8) 会報掲載原稿の依頼

会報に掲載予定の座長、司会者の感想、特別寄稿、研究会活動、研究室めぐり、海外だより等の原稿を会員各位に依頼した。

2. 総会議事録

報告事項

1) 平成6年度事業報告

(1) 体育心理学専門分科会関係

プレ・セミナー 10月3日(月)

15:00-15:30 体育心理学の動向

米国応用スポーツ心理学会および北米スポーツ心理学会の動向

高妻容一(近畿大学)

15:40-16:10 訳本から学ぶ

「運動学習とパフォーマンス(調枝孝治監訳、大修館書店)」

久保玄次(愛媛大学)

16:20-17:20 博士論文紹介

「危機と人格形成」について

中込四郎(筑波大学)

18:00-19:30 懇親会 大沼ホテル 山形市白川町2-1-10

Tel: 0236-32-1111

1日目 10月4日(火)

9:00-15:00 一般発表

2日目 10月5日(水)

キーノートレクチャー(9:00-9:40)

テーマ 「スポーツ集団の生産性と集団凝集性、リーダーシップ」

司会 杉原 隆(東京学芸大学)

演者 丹羽 劭昭(奈良女子大学)

総会(9:40-10:10)

シンポジウム(10:10-12:00)

テーマ 「優れたスポーツ集団をつくるための心理的スキルをめぐって」

司会 船越 正康(大阪教育大学)

演者 飛田 操(福島大学) 「リーダーシップスキル」

岡沢 祥訓(奈良教育大学) 「コミュニケーションスキル」

石井 源信(東京工業大学) 「目標設定スキル」

(2) 体育心理学専門分科会会報(第6号通巻34号)の発行

平成6年8月31日発行で、会員591名に配布しました。住所不明のため、28名は返送されてきました。

2) 平成6年度会計報告

平成6年度収支決算報告(1993.11.17~1994.大会終了日)

<収入の部>

前年度繰越金	843,619
分科会補助金	122,000
年会費(546名)	546,000
<hr/>	
収入合計	1,511,619

<支出の部>

会報関連費

テープ起こし	21,824
会報印刷費	100,734
会報発送費	163,890
<hr/>	
小計	286,448

事務局事務費

文房具	45,890
発送業務、資料整理	79,080
封筒、はがき印刷費	81,370
<hr/>	
小計	206,340

通信費

郵送料	53,860
料金受取人払い用切手	22,000
<hr/>	
小計	75,860

シンポジウム等関連経費

93年度	80,940
94年度	130,000
<hr/>	
小計	210,940

支出合計	779,588
次年度繰越金	732,031

3) 日本体育学会評議員選挙結果

平成6年3月4日付で体育心理学専門分科会選出の評議員の選挙を行いました。締切りの3月31日(木)後に開票の結果、次の19名を選出し、日本体育学会選挙管理委員会に報告いたしました。任期は平成7年4月1日～平成9年3月31日までです。なお、投票率は22%の低率でした。

荒木 雅信	石井 源信	市村 操一	伊藤 政展
猪俣 公宏	上田 雅夫	岡沢 祥訓	岡村豊太郎
工藤 孝幾	近藤 充夫	杉原 隆	調枝 孝治
徳永 幹雄	中込 四郎	丹羽 劭昭	橋本 公雄
藤田 厚	船越 正康	山本 勝昭	

協議事項

1) 平成7年度事業計画案

(1) 日本体育学会第46回大会関係

1. プレ・セミナーと懇親会の開催
2. キーノート・レクチャーの開催
3. シンポジウムの開催

(2) 体育心理学専門分科会会報第7号(通巻35号)の発行

目次(予定)

- I 特別寄稿・短報
- II 日本体育学会関係(平成6年度、7年度)
- III 地区別研究会活動
- IV 研究室めぐり(2～3大学)
- V 海外だより
- VI その他
- VII 事務局報告

○上記原稿については、事務局から会員の人に依頼する。

2) 平成7年度予算案 (1994.10.7～1995.大会終了日)

<収入の部>

前年度繰越金	732,031
分科会補助金	120,000
年会費	540,000
収入合計	1,392,031

<支出の部>

会報関連費

テープ起こし 50,000

会報印刷費 200,000

会報発送費 200,000

小 計 450,000

事務局事務費

文房具、コピー関連 50,000

発送業務、資料整理等 100,000

小 計 150,000

通信費

郵送料 150,000

シンポジウム関連経費

95年度 150,000

予備費 492,031

支出合計 1,392,031

3. 日本体育学会体育心理学専門分科会の会則案

第1条 本会は日本体育学会体育心理学専門分科会と称する。

第2条 本会は体育・スポーツに関する体育心理学研究の発展のため、会員相互の情報交換を行い、研究と実践を推進することを目的とする。

第3条 本会は第2条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 研究会の開催
- (2) 会報の発行
- (3) 会員の研究に資する国内、国外の情報の収集と紹介
- (4) その他、本会の目的に資する事業

第4条 本会の会員は本会の趣旨に賛同する者で、本会の会費を納入した者とする。本分科会に貢献のあった者を名誉会員にすることができる。

第5条 本会に次の役員を置く。

- (1) 会長 1名
- (2) 運営委員 若干名

第6条 本会の会長の任期は2年を原則とする。ただし、運営委員は留任を妨げない。

第7条 本会の会議は総会と運営委員会とする。

第8条 総会は、次の事項を審議決定する。

- (1) 会長、運営委員および名誉会員の選出
- (2) 事業報告および収支決算
- (3) 事業計画および収支予算
- 4 会則の改正
- 5 その他

第9条 総会は年1回、日本体育学会の開催地で開催し、当日の出席会員をもって構成する。総会の議事は出席会員の過半数をもって決定される。ただし、会則の改正は出席会員の3分の2以上の賛成によって決定される。

第10条 会長は運営委員の投票により選出する。会長候補者が過半数に満たない場合は、上位2名の決選投票とする。運営委員は会員が選出した日本体育学会体育心理学専門分科会選出の評議員がこれにあたる。

第11条 会務の執行は、運営委員と協議の上、事務局が担当する。

第12条 本会の経費は会員の会費（年額1,000円、ただし、名誉会員からは徴収しない）、日本体育学会の補助金ならびに寄付金の収入によって支出する。

第13条 本会の会計年度は日本体育学会終了日より翌年の体育心理学専門分科会総会までとする。

第14条 本会の事務は事務局で行い、当分の間、九州大学健康科学センター内、
（〒816 福岡県春日市春日公園6-1 TEL092-573-9611, 内線721, FAX092-592-2866）に置く。事務局には幹事（若干名）をおき、任期は4年間とする。

4. 専門分科会企画についての運営委員の意見（平成7年度）

1. キーノート・レクチャーについて

- ・スポーツ集団運営における集団技術スキル（スポーツ選手指導における集団スキル）
- ・スキーマ理論の再検討
- ・イメージトレーニング
- ・体育心理学とパーソナリティ
- ・スポーツにおける心と身体
- ・新しい視点から身体運動を考えるーダイレクトパセプションー

2. シンポジウムについて

- ・スポーツ選手指導における集団スキル
- ・保健体育科における適応児の指導について
- ・優れたスポーツ集団をつくるための心理的スキルⅡー優れたスポーツ集団のチームのリーダーー
- ・スポーツカウンセリングルームの活動と将来ーカウンセリングとメンタルトレーニングー

3. プレ・セミナーについて

- ・会員の自主企画
- ・本年度の形式・内容で結構、全員でフリートーク形式1時間位
- ・自己快適走を中心とする多くの成果

4. 会報について

- ・非常に充実している
- ・内容的にとっても充実している。苦勞が多いと思うがよろしく。
- ・若手研究者の研究論文に対する評論→体育心理学評論のコーナー・国際的研究の動向
- ・今年の日スポ心・ワークショップB「スポーツ心理学レビュー」の発表内容を紹介
- ・入念で充実した内容、分科会の新しい息吹を感じます

5. その他

- ・プロジェクト研究の企画をしてほしい
- ・体育心理学の成果のまとめ「知の体系化」を行ってほしい
- ・発表形式、実験調査等→ポスター発表、事例研究→討議時間を長く
- ・自主シンポの時間を設ける
- ・スポーツ心理学との整合性については自分も整理できていない
- ・一般発表の形式にポスター発表をとり入れたい
- ・事務局主催もしくは有志によるワークショップを設けたい

IX. その他

1. 新入会員紹介

臼井 直樹	(常葉学園浜松大学)	北野 かおり	(大阪教育大学)
國枝 和美		齊藤 実	(鳴門教育大学)
邨 小京	(京都教育大学)	清水 安夫	(東海大学)
園田 章子	(日本体育大学)	曾根 幹子	(広島市立大学)
田中 伸明	(順天堂大学)	辻江 正道	(大阪教育大学附属高校)
松本 あづさ	(鶴巻温泉病院)	三村 由紀	(筑波大学)

(アイウエオ順)

2. 博士号取得者紹介

体育心理学専門分科会に所属している人で、1989年度から1993年度までの過去5年間に博士号を取得された人の氏名ならびに研究テーマを第6号会報でご紹介しました。今年も引き続いて、昨年度の会報でご紹介できなかった人、また、その後取得した人のご紹介をいたします。

なお、1989年度以降に博士号を取得されており、昨年度および今年度の会報でご紹介できなかった人は、是非、事務局までご一報くださるようお願いいたします。

萩原明子 お茶の水女子大学

取得大学・年 The Ohio State University (1992年) Ph.D.

研究テーマ Identifying and comparing daily stress experiences, physical and psychological health, and coping strategies among Asian and American graduate students. (アジア人及びアメリカ人大学院生における日常のストレス、身体的・心理的健康、及びストレス対処方の比較分析)

橋本公雄 九州大学健康科学センター

取得大学・年 奈良女子大学 (1995年) 学術博士

研究テーマ 快適自己ペース走による心理的ストレス低減効果に関する基礎的研究
-特に運動に伴うポジティブな感情の変化について-

編 集 後 記

会報第7号ができましたので、お送り致します。第6号よりさらに充実した内容のあるものと、心がけたつもりですが、如何がでしょうか。ご執筆頂いた先生方には厚く御礼申し上げます。なお、一般研究発表（座長報告，P28－P42）の欄では、ご執筆頂いた文章とは若干異なっている先生がおられると思いますが、全体を整えるため変更させて頂きましたので、ご了承ください。

ところで、事務局では会員の皆さんの活動状況や近況を十分には把握しておりません。さらに良い会報をつくるためには皆さんの声や投稿、情報の提供が必要です。ご連絡頂ければ対応してきたいと考えますので、今後ともご協力の程よろしくお願い致します。

（文責：K. H.）

日本体育学会体育心理学専門分科会会報 第7号（通巻第35号）

平成7年8月29日 印刷

平成7年8月31日 発行（非売品）

発行責任者 徳永幹雄（代表）

〒816 福岡県春日市春日公園6-1

九州大学健康科学センター

TEL 092-573-9611 FAX 092-592-2866

e-mail hasimoto@ihs.kyushu-u.ac.jp

発行者 日本体育学会体育心理学専門分科会事務局

印刷所 コロニー印刷

〒811-01 福岡県粕屋郡新宮町上府1592

TEL(092)962-0764

メンタルトレーニング・システム

30100 心理的競技能力診断検査用紙(DIPCA.2)

DIAGNOSTIC INVENTORY OF PSYCHOLOGICAL-COMPETITIVE ABILITY FOR ATHLETES

スポーツ選手は、技術、体力と共に心理的競技能力(通称、精神力)が必要であります。実際の試合場面では、試合中の心理状態(心理的パフォーマンス)が技術や体力に影響し、実力発揮を左右して、競技成績が決まります。

このテストは、試合中の心理状態に影響する一般的傾向としての心理的競技能力を調査します。その結果にもとづき、試合中に優れた心理状態が作れるトレーニングをするために作成されたものです。スポーツ選手の心理面の強化に役立ちます。

30101 手引き書

検査の方法、診断法、比較資料を紹介します。

30110 心理的競技能力の診断結果(採点)

診断結果はコンピュータにてプロフィールやコメントが打ち出されます。

30105 心理的パフォーマンス診断検査用紙(DIPP.1)

DIAGNOSTIC INVENTORY OF PSYCHOLOGICAL PERFORMANCE IN COMPETITION

試合中に望ましい心理状態で試合ができたかどうかをチェックするために行うものです。何故なら、試合で自分の実力を十分に発揮するためには、試合中に望ましい心理状態ができたかどうか、鍵になるからです。

30115 スポーツ選手のメンタルトレーニング・カード(MTCA.1)

MENTAL TRAINING CARD FOR ATHLETES

スポーツ選手のメンタルトレーニング法を分かり易く解説しています。目標設定・リラクゼーション・集中力・イメージ等のトレーニングをステップ1~9に分けて紹介しています。自分のトレーニング内容を記入し、カードに沿って自分でメンタルトレーニングが可能です。


30120 テニスのメンタルトレーニング・カード(TMTC.1)

TENNIS MENTAL TRAINING CARD

テニス競技用に作られたカードです。このカードにそってメンタルトレーニングを行います。

■トレーニングの内容・順序

①心理的能力の診断



心理的競技能力診断検査(DIPCA.2)を実施し、採点結果により自分の心理的特徴を知り、メンタルトレーニングの目標を立てます。検査用紙とマークシート方式があります。いずれもコンピュータ処理できます。

②目標の設定



③リラクゼーションのトレーニング



体温バイオフィードバック装置TP-5
不安や緊張を取り除くためにリラクゼーションのトレーニングをします。とくに皮膚温のバイオフィードバック機能を用いてトレーニングします。


④集中力のトレーニング

⑤イメージによる課題のトレーニング



イメージ測定装置TP-6
最初にイメージの基礎練習を行い、つぎに作戦などについてイメージを用いてトレーニングします。イメージの鮮明度を検証するために呼吸曲線や皮膚温の変化を測定します。

⑧反省



試合の結果を反省します。心理的パフォーマンス診断検査(DIPP.1)を用い、試合中の心理状態や動きが望ましいものであったかどうかを評価します。さらに、試合の感想をスポーツノートに記録します。検査用紙とマークシート方式があります。いずれもコンピュータ処理できます。

⑦本番(試合)



結果打ち出し

⑥練習での利用